1　自分らしいスタイルが実現できるまち

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
①居住	・「古民家」は魅力もあり、積極的に利活用なども可能だが、4、50 年前に多く見られた大規模ニュータウンは区画面積、住宅規模、築年数、立地条件がほぼ同じであり、流通に出回る時期も重なるため売却価格を下げることでの競争になってしまい、その結果地域の物件価値まで波及し下がることになる。 ・移住の話だが、今までは一軒家や、便利な都市の近くに住むことが多かったと思うが、それがコロナの状況を通して変わるのではないか。実際に都市に住む中で、周囲との交流や子どもが自然の中で遊ぶ場所が少ないため、移住したいと思う人が多いが、実際は地域の雇用不足などの理由で、移住できないという状況があることを知った。 ・住む場所はどのような意味を持つのか。そこに特徴がない限りどこに住んでもあまり変わらないのではないか。例えば、人が生活する時に大学や会社に行くなど、その地域で過ごす時間はあまりない。利用するのは、主にスーパー、コンビニ、駅だけである。これらがあれば逆にどこでもよいのではないだろうか。このような考えが浮かんだ理由として、今はこみんか学生拠点を通し、三田市の社会人と出会い、三田市の様々な店に行くようになったが、それ以前は、三田市に住んでいても三田市らしいことを全くしていない。家とスーパー、学校の行き来しかしていなかったが、それでも生活できる。日本はほとんど人が住んでいる場所は駅があり、スーパー、コンビ	・都会と田舎の二拠点居住や移住の増加。 ・以前テレビで徳島県と東京都においてどちらの小学校の授業も受けることが可能という連携が既に始まっているという番組を観たが、今後全国的に広げる事で二拠点居住が加速しやすくなる。 ・<u>居住地域と働く地域と二拠点生活（複数拠点生活）が当たり前になっている</u>。 ・テクノロジーの進歩で、人口減少地での生活継続へのハードルが下がる。<u>住みたい地域で住み続ける</u>ことが可能になる。 ・モノを所有する生活からリースなど持たない生活へかわる。 ・団体行動から個人行動に変化する。 ・所得は減少するが、生活コストが低下。それでも成り立つ生活スタイルに変化する。 ・空き家の利用など、生活コストが低い地域に居住すれば、<u>複数の家を所有</u>することが可能になる。 ・現在「兵庫空き家相談センターで」では「家」のエンディングノートを現在作成中である。これが普及することにより問題が大きくなる前に「家」の方向性を先に定めることができる。 ・今般のコロナ禍により都市集中の都市構成や住み方、働き方も変化する。 ・最後の住処として選ばれる魅力(便利・快適さ)がある。 ・魅力ある生活空間であること。 ・住みやすい場所であること。 ・住宅地や道路整備など大きな面積開発ではなく、都市の中に生物環境を活かした大きな自然公園を作ること。<u>開発から自然を守り、人口の都市集中を防ぐ</u>。 ・未来へ残しておきたい動植物の保護を実践する。 ・自然公園の環境維持管理。 ・(移住関連の話について) 新型コロナウイルスのリモートワークの普及によって、都市から離れた所でも仕事ができるという状況になれば、移住をしたいと考える人が移住のしやすい環境になり、地域との繋がりもできるのではないだろうか。 ・バラバラの地域のそれぞれの特色を尊重するという観点から、兵庫県は都市からのアクセスや、リモートワークのアクセスもよく、それぞれの地域の魅力

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	ニ、郵便局があり、公共交通機関がどこの地方都市にも整備されている。住む場所はあまり重要ではないのではないか。 ・（住む場所はどこでもよいのではないかと言う意見に対して）私はそうはならない。住めば愛着湧き、離れたくなくなる。地元にいた時は地元が好きだった。三田市に住むと三田市に愛着が湧き、山がかわいく見えてくる。景色が良いからという訳ではなく、社会人と会えるというところも大きい。 ・「住めば愛着がわく」という意見に共感する。私は大学生の時に自分で起業し、実家のある西宮市から三田市に移住した。三田で起業した理由は、三田市に仲のよいおじちゃんがたくさん居たからである。どこの地域に住んでも便利なので、仲の良い人がたくさんいる場所に住む、知り合いが多く住んでいるから好きになるなど、起きることが面白い。 ・都会から若者が田舎に憧れて移り住んでくることがあるが、実際に住んでみてもすぐ出て行ってしまう。町おこし協力隊が来ても、お金だけもらって何もしないという人がいるという話を聞いたことがある。 ・町おこし協力隊として田舎に来て、そのまま住む人と帰ってしまう人は五分五分くらいいる。	もあるという面で移住や新しいまちづくりなどが良くなると思う。 ・先ほどの話で移住したいができない人や、市街化調整区域で家が建てることができない人など、新たな交流が生まれるかもしれない機会を妨げているのではないか。また、移住したいと思っている人を移住しやすくなるようなシステムが、もっと充実したらよいのではないかと思う。 ・家を建てた後に転勤するかもしれない。30 年後も西宮市に住み続けたい。西宮名塩に住んでいるが、この先廃れていけば住みたいといえなくなるかもしれない。 ・過疎化が進む中、皆が暮らせる町にするために、問題に取り組み、情報誌を発行している。
②新規住民の受入れ	・人口の減少、少子高齢化、担い手の不足などの問題がますます顕著になってきている。 ・参加者が高齢であるため、お祭りでは地域住民でだんじりが引けず、軽トラックで引いている。祭りの準備などの簡素化や他の地域	・西谷地域への移住者は増えている。地域住民の新規住民の受入れは消極的だったが、受け入れの間口が広がり、意識が変化すればよい。 ・受け入れ側が積極的になれば活発化する。 ・地域独自ルールを新規住民に柔軟に適用する。（高額な自治会費の負担軽減等） ・トラブルを避けるため、住民の話を聞き、「どのよう

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	からの応援、男性しかできなかった役を女性でもできるようにするなど、柔軟になってきた。 ・住みやすいだけの地域になっている。 ・子どもも徒歩圏内であれば、知らない人でも挨拶をしている。 ・近所の方が野菜を持ってきてくれる事がある。 ・集会所が小さく、自治会加入率が上がらない。	なことで来ているか」「どのような思いなのか」を理解した上で対応するように取り組んでいる。 ・昔から住んでいる人が多いが、私自身は新しく転入してきた世帯で自治会に入っていないが、近所の人やすれ違う方と挨拶をするようにしている。 ・「住みたいまち」の実現にあたり、まちの環境の持続可能性を高める「地域環境づくり(環境作り)」と未来のまちの担い手の「次世代の育成(人作り)」の２つを重点領域に、活動を推進している。 ・新規参入者と地元住民交流がうまくいっていないことが多い。接点を作れるよう、双方が変わるべきである。 ・食物自給率をあげるため、空いた土地で農業をし、農業従事者を増やす必要がある。 ・手軽に入手できる食べ物ではなく、健康維持や高齢化社会において食の大切さという将来を見据える食文化について、今後も取組みを通して伝えていく。 ・人口が減ってきて食糧自給率を上げないといけない。農業をなんとかしなければならない。 ・JA と協力して、黒大豆オーナー制を実施。年３回のオーナー様の作業日を設け、300 組 500 人以上の皆さんが来園、楽しんでいる。
③仕事	・三田市は都市部（大阪、神戸）への２ウエイアクセスでやや都会を匂わせ、また山間部を控え田舎的要素もあり、昨今の在宅勤務に最適な地域である。 ・働き方の多様性では、働き方改革についてよく聞くが、これもなかなか進んでいないという気がする。 ・川西市内には働ける場所が少なく、大阪等へ働きに出ている状態であり、川西市内で仕事がしたいという思いがあっても、川西市外にしか求人がない。 ・当団体では、会議を行うことでメンバーの合意を取付け、様々な事業を展開していく団体である。会議の場で顔と顔を突き合わせて、意見や思いを交換し、事業の精度	・副業が認められる。<u>いくつも収入の柱があり、許容性が生まれてくる</u>。 ・今回のコロナ禍で急速に在宅勤務が進んだことにより、家庭内のコミュニケーションが増えて良い結果であったので、このまま<u>テレワークが普通の日常</u>になって行くとよい。 ・リモートでの会議が進み、必要時に、必要な人が、必要なだけの地域での協議ができる。 ・テレワーク機能を用いた社会参加を促進する。 ・働き方改革が良い方向に進めばよい。 ・テレワークが増え、リモート会議・WEB 会議にシフトする。 ・収入が安定し、安心した生活できるようになる。 ・働き方改革は働かせ方改革、働きがい改革であり、これは企業がどうにかしてくれないとどうにもならない。このようなことを具体的に考えてほしい。 ・若手にいてほしいなら、仕事、AI などの場を確保してずっといてもらうことが必要である。 ・30 年後は専業主婦として、夫のお金で生きていきた

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	を高めていくことが私たちの活動の肝であり、当たり前の光景だった。私はそうした場の設定を仕事としていた。ところが、新型コロナウイルスの影響を受け、通常通りの会議が難しくなった。そこで、４～５月からZoomを用いたWeb会議を導入し、現在は会場参加とWeb参加のハイブリッド会議を試験的に採用し、運用している。その中で、見えてきたことがある。Web会議は遠方からの参加者の移動コストの削減、緊急時にはスピーディーな会議設営が可能である等多くのメリットがあることがわかった。一方で、今の通信技術の限界で、僅かながらタイムラグが生じたり、空気感が共有しにくかったりと視覚、聴覚のみでやりとりすることに意思疎通の面ではまだまだ不足感があるというデメリットに直面している。 ・兵庫県の議会運営をみていると、まだまだ対面式で行われている。 ・女性という立場から。先日久しぶりにハラスメントのない職場作りという議題で定例会をやった。今は会社でも行き届いていて女性がそういう目に遭うというのも考えづらくなってきていると思う。 ・大学生と事業をつくっている。大学生と関わることで、発想力、独自の人脈を目の当たりにし、驚かされることが沢山あった。買い物はネット通販、仕事はリモート等を活用し、個人で完結する生活や働き方が当たり前になってきている。	い。そこまで働いている自信がない。 ・仕事をバリバリしたいので、子どもが生まれても育休などを取りたくない。定年するまで働き続けたい。家事をするから仕事をしたくないという男性も周りにいる。 ・育休や産休をとった後にまた働きたい。30年後も働き続けていたい。 ・夫だけでなく自分も働きながら、子どもをいつでも送り出せる状況にしたい。 ・30年後もずっと共働きがよい。 ・結婚しても働き続けていたい。 ・奥さんにも働いてほしい。 ・働きながら子育てができればよいと思うが、両親の介護の問題もある。仕事を辞めて介護をしなければならないかもしれない。 ・30年後も働き続けていたい。両親の介護も必要になると思う。 ・ゆくゆくはビジネスを起こしたい。人生一度きりなので、チャレンジしてみたいと思う。 ・経済的な面で仕事はしなければならないのでパート等をしているかもしれない。 ・労働市場に参入していなかった人（女性、高齢者、障害者）が、自分の能力をいかし、やりがいと、生きがいを持ち、社会貢献する一方で、家族や仲間とのつながりを通じて充実した生き方（ワーク・ライフ・バランス）が浸透した社会が必要である。
④起業家への支援	・猪名川町域の大半を占める市街化調整区域では、企業などの立地、起業が困難である。	・今後は、観光その他により交流人口を増加させることで、事業者の持続的発展に繋げていく取組みが重要になると感じている。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		・猪名川町の特色や地域資源を活かしたビジネスの創出・展開やソーシャルビジネスの実施。 ・コミュニティビジネスなど多様な起業・創業の支援。 ・当団体では、多様な人材が交流し、情報やアイディア共有ができる拠点として、また起業家の掘り起こしからスタートアップ支援、アフターフォロー等の創業支援体制の充実と強化を図り、起業家の育成支援を行う「インキュベーション・コワーキングスペース」を開設する。 ・企業・創業を目指す若者が、その技能・経験を身につけるため、市内多種多様な事業者が受け入れる仕組みづくりを模索するなど、自分自身が起業・創業する貴重な人材として市域の中で育っていけるシステムを構築する。 ・既事業者と転入・転居などにより新しく町へ来られた事業者や起業した人との交流会を開催する。 ・多くの関心を持てる多様化した事業展開が必要である。 ・活動主体と地域住民が中心となる工夫が必要である。 ・個々のスキルをいかす場を最大限のプラットホームで用意する。 ・兵庫県産業活性化センターの助成金（異業種交流活性化助成金）でアバターを作成している。漢字そのものがキャラクターになり、未就学児、小学校低学年のモチベーションを上げ、アニメに興味を持ってもらえたらよい。 ・直接支援を支援する人（中間支援）を増やし、力量をつけることが求められる。
⑤空き家の未然対策と活用	・都市部では空きスペースを確保するのに費用がかかる。 ・住民減少により空き家が増加する。 ・芦屋の奥池周辺でも高齢化が進み、空き家も増えている。 ・阪神地域南部（都市部）と北部（山間部）において、空き家問題に対する意識の違いがある。 ・南部は一般的に「売れやすい地域」であり、空き家問題に関しても流通に関することより相続や隣地トラブルによるものが多い。 ・空き家は表面化した時には既にま	・空き家の啓蒙活動も大切だが、空き家予備軍や隠れ空き家を掘り起こし、未然対策が重要である。そのため当法人では地域に寄り添う「空き家対策ナビゲーター」を養成している。ナビゲーターは地域の一住民であり地域の情報が入ってきて吸い上げる役割でもあり、近しい相談者でもある。 ・利用できる空き家は自治体が借り上げか、買い上げをし、地域コミュニティの場所として提供する。 ・2050 年は団地がなくなって、一戸建てが増え、庭付きの住居が増えると思う。 ・放置すれば空き家や空き地が増える。市民農地としてもっと簡単に活用できるようにしてほしい。家庭菜園が増えて、庭先に育てた野菜をその日に食する

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	ちの環境を損なっている。 ・両親をこちらに呼ぶと、実家が空き家になるのが心配である。	ようにしたい。 ・現在空き家になっているお宅を自治体によって買い上げる取組みが必要である。 ・空き家を活用した地域住民のつながりづくりが必要である。 ・空き家や単身高齢者宅で、ビジネスとしてワーキングシェアなどを行えば、安否確認や収入源になる。
⑥ゆとり・いきがい	・コロナ禍で移動制限があるなかでもリゾートを求める。近くのホテルでちょっとした贅沢、非日常を体験できるとよい。阪神地域はそれができる。車で１時間の距離で、様々なロケーションが揃っている。 ・おうち時間が地元時間になる。 ・近所のママ同士が知り合いになれば、地域の情報が SNS でリアルタイムに入手できるため、自治会加入者が少ないと思われる。 ・時代の変化のスピードが速すぎて、高齢者が変化を受け入れられない（ついていけない。）。拒否反応を示す人口の比率が多いので、大きく変化できない。 ・共働き世帯増加で自治会のために時間をさけない。 ・清荒神でテニススクールを運営している。リモートで仕事をするのは難しいが、利用者が会社に行かなくなって時間ができ、リモート（仕事）の間に、テニスをする人で盛況だった。業種により、リモートの間に上手くリフレッシュしてもらえたら嬉しい。子ども達に指導しているが、子ども達と話をしていると、クラブ活動に入っている子が少ない。強制するには問題があるかもしれないが、放課後にアルバイトをしている学生に、「そんなにお金に困っているか」と聞くと、「ただ、遊ぶお金が欲し	・時間の豊かさが重視される。 ・仕事と趣味、やりたいことの両立、重なりが増えてくる。 ・生活と仕事の境界線が曖昧になれば、趣味や地域活動などのサードプレイスが充実し、時間や気持ちにゆとりができる。 ・空いた空間を活用した自然との共生が可能となる。 ・あくせくするより、丁寧にゆったり心豊かなくらしができるほうがよい。 ・「ミニマリスト」まではいかないが、かかえこまずシンプルな暮らしがしたい。 ・物理的、時間的に実現するための科学技術（AI、オンライン、テレワークが一般的になっている。 ・健康維持と生きがい発見のための文化活動の重要性が高まる。 ・それぞれができることをする相互運営もよいが、お客様として受け身ではなく､他人の世話をする方が、張り合いがあり、元気でいられると思う。 ・一人一人に考えるチャンスが与えられる。 ・地元時間をデザインする取組みが必要。 ・個人が充実していれば人口減少は関係ない。 ・アナログへの気付き。 ・都会でも静かに暮らす。 ・小さく始めて大きく育てるという考え方の土壌が大切である。 ・まずやってみる、というアクションまでの早さが大切である。 ・面白がる力の高さが大切である。 ・一人一人のやりたいことを後押しし合える地域コミュニティ、行政サービス、企業ビジネスなどが有機的につながり合う状態になっている。 ・(地域で看取りをする活動をしているので) 森でも植物でもよいが、森の中で感じる死生観もあると思われる。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	い」と言う。 ・地域で看取りをする活動（ホームホスピス）に取り組んでいる。民家を活用し、５人の住人と暮らしている。自分らしく生きていけるまちづくり、繋がりづくりに携わっている。看取ることだけではなく、今やってみたいことをお互い応援し合おうよ、と言うようなこと。自由研究のように、虫の一生を調べたり育てたりする。 ・最近、夢を持っている若い人が少ないと感じる。	・元気な高齢者に活動の場を提供できることが必要である。 ・2050 年には<u>若い人が夢を語れる時代</u>になっていたらうれしい。
⑦効率		・自動化による、制約や制限の減少。 ・<u>AI の発達により、自宅で行政手続き、医療、仕事、買い物、レジャーが可能になる</u>。 ・遠隔対話システムなどの導入により役所窓口へは行かずに、自宅で住民票の発行など必要な手続きが誰でも簡単に行える。 ・電気やガスのインフラをこのまま維持しようと思うと、人口が減れば一人当たり使用料が上がる。（韓国のように）家で作るより食べに行った方が安いということにもなり得る。 ・行政は規模が縮小するが、オンライン化などで手続きがスムーズになる。

２　自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
①文化芸術	・演劇活動の衰退と合唱活動の高齢化。（女性が９割） ・地域活動の担い手、若手の減少が見られる。 ・集会場・稽古場・練習場の不足による技術芸術当の継承が難しく、新たな発想展開が必要。例えば、苦慮している芸術家たちの支援策、アートビレッジ構想（練習村）長期間滞在型（絵画など大型200号以上）制作場所、楽器置き場付きオーケストラ・吹奏楽練習場、演劇練習など集団生活ができる練習場及び制作場など。 ・日本人が日本人でなくなりつつあるように感じるので、日本古来の伝統、行儀作法などを子どもたちに教えることが大切な取組みになる。 ・文化を愛する人が多く、芸術文化も生活に浸透している。芸術文化の愛好家の多くが高齢者のため、今回のコロナ禍の影響により、文化離れが進んでしまっている様で痛恨の思いである。 ・催しに多くの観客が来るようになったが、生活手段を芸術にすることや専門職としての場が多くない。 ・絵画造形系の専門家は多くない。 ・芸術系大学の活気がない。 ・大学との連携が必要である。 ・伝統や継承文化についての認知が希薄であり、実生活での必要性が感じられないという考えが感じられる。 ・心の遊びやゆとりについての教育が欠如しているように思われる。 ・地域や社会を構成する人間であることの自覚が薄いように思われ	・文化芸術がソフト、ハードともに地域住民になくてはならない場所として活用されること。 ・地域住民と共同で何かを行う時は、共に１つのことを造り上げる関係を作ること。 ・準備段階から地域住民と相談し、相手方にもメリットがあることを理解してもらう。 ・阪神・阪神北の伝統を受け継ぎ、次世代への創造を作る。 ・地域の特性である吹奏楽（全国大会金賞受賞団体）、合唱の活用。 ・長年、培ってきた活動を継続するため、定期的に発表の場を設けているが、今後は小コミュニティとの交流を図っていきたい。 ・新型コロナウイルスの影響により、コンサートや演劇など全ての舞台芸術が、開催不可能になった。感染症が地球上からなくなる事はないので、パンデミックによる社会の不安や経済的ダメージに備えて、早急な万全の医療体制の構築が不可欠。 ・地域を巻き込んだ芸術祭を開催する。 ・様々な年齢層の方々に文化活動に参加していただけるよう、小規模であっても地道な活動を続けていくことで、人口自体は減少しても文化活動に参加する人口を増やせるのではないかと考える。 ・出会いの場を再構築し、自分達が社会の中で置かれている状況を考える機能としての劇場を活用する。 ・文化活動は、まずライブで共有するのが理想と考えるが、将来にわたりYouTubeの様なネットワークを通じ誰でもが気軽にどこでも文化に接することも大切。将来はどの家庭（高齢家庭）にも同じように情報が届くように技術が整備されていると想像する。 ・「人々と文化芸術をつなぐ様々な方法を考えて実行し、人々の日常に文化芸術を織り込む機会・人・場を充実させる」ことをミッションに掲げ、「①子どもの育ちに寄り添う文化、②もっと身近で気軽な芸術文化、③親しみやすい文化振興財団」の３つの取組みを重点事業とし、企画政策や広報の経験を有する専門職員を新に迎えて事業を展開している。 ・文化芸術は決して一部の愛好家のものや、自分にとって遠い存在ではなく、生活の質（QOL）を高め、心豊かな生活を送るうえで不可欠なものであること、また、

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	る。 ・尼崎市では、伝統文化や地域の文化が消滅している。祭りや寄り合いが減りつつある。 ・(俳句関連の文化施設であるため)俳句にどのように興味を持ってもらうかといことを日々考えている。 ・県立芸術文化センターでは、本物のオーケストラを鑑賞できる。この地域には、そういった本物に触れ合う機会がある。	文化芸術が持つ社会包摂（social inclusion)機能により、様々な社会的課題を解決できる可能性があるという考えが広がり、定着している社会。 ・文化活動のために活動する場所が必要。 ・尼崎城の北東角か南東角のどちらかに日本の文化発信の拠点ができればと考えている。 ・伝統と文化の薫るまちづくりを目指し、歴史的場所などの掘り起こしをする。 ・尼崎寺町と連携した歴史などの勉強会をする。 ・地域とつながる音楽会、茶会や、写真展、絵画展の開催。 ・年１回市民文化祭を開催し、三田市の文化活動を維持・発展させる。 ・地域から広域連携による祭典などを通し、地域を活性化する。 ・小グループ、自治会での文化活動発表等、人々が身近に感じられる文化活動。家族や知人が出演・発表していれば身近に感じ文化活動に足を運びやすくなる。 ・病院、学校（生徒・学生)、老人施設、集合住宅の集会所などで発表会を開催したり、ともに発表会を行ったりするなど、地域を巻き込んだ活動をする。また、子どもの時から誰もが文化に触れることができる機会を提供していくことが必要。 ・これまで実施してきた定期発表会以外に、地域の小コミュニティ（学校、福祉協議会、病院、老人施設、保育所等）との交流連携に個人と向き合って取り組んでいきたいと思う。 ・事業に出演するアーティストと参加者並びに参加者同士が交流できるような事業を実施することで、芸術文化を通じたつながりや、さらなる活動の広がりを生み出す場を提供している。 ・大阪神市（180 万都市）の実現のために、７市１町が知恵を出し合って、阪神間総合文化、学芸、経済都市を目指していきたい。 ・イベント関係者は現在千人以上であるが、スタート時は 15 人くらいの実行委員会だった。地元の自治会で説明会を開き、周辺住民の理解を得た。お互いに理解してもらっている人に仲介してもらった。 ・『ITAMIGREENJAM』は、表現と活躍のプラットホーム。場所と資金と集客は『ITAMIGREENJAM』が行い、あとはおまかせである。場所と市民・団体をマッチングす

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		る。 ・地域では、魅力ある素材を新しく発掘するため、共同作業（里づくり、環境美化、河川美化、祭り等）を通じて、互いが共に汗を流しながら働き、集える環境を創造し、お互いに経験・特技を聞き出せる人間関係の酸成を図り、発掘した素材を地域に還元していく。 ・芸術をポイントにしており、心を豊かにする活動をしていきたい。阪神間モダニズムや具体美術もある。具体美術であれば、尼崎では白髪一雄氏、宝塚では元永定正氏が有名。2050 年はどのようになっているかはわからないが、阪神間の文学、芸術、建物などを一体的に考えることが重要であると思われる。 ・（オーケストラ鑑賞など、この地域には本物に触れ合う機会があるが）うまく発信ができていない印象がある。ウィズコロナからアフターコロナにうまく移行できるよう、今のうちから取り組んでいくことが必要である。 ・10 年先、20 年先を目標に、小さなサロン文化を、点から線、線から面になるようにと考えている。
②スポーツ		・子どもに何をさせるか、何が向いているかわからない親子を対象にスポーツ団体と共に、10 種類以上のスポーツ体験ができる場を設置する。 ・スポーツの裾野の広がりとともに、スポーツを通じての地域交流を目指す事業を行っている。
③祭り	・地域の祭りが減少している。 ・自治会の役員が高齢化している。	・祭りの設営など民間委託を検討すればよい。
④人材育成	・文化は人が生きていく上で必要という意識が行政内で薄く、他の行政分野と比べ後回しにされることが多い。 ・各種団体の活動活性化を図るため、各団体のキーパーソンへの支援や関係を深めると共に、活動補助対象の多様化を図る。	・日本人向けに外国の文化を紹介する講座を開催し、異文化を認めることのできる価値観を養う機会を提供している。 ・文化を媒体とし、観光・商工・地域社会など様々な分野と結びつき、コミュニティ形成、まちの活力醸成など豊かなまちづくりに貢献する。行政はこれらの活動の環境づくりでサポートをしてほしい。 ・次世代作りでは、各人の目的とスタンスを明確に認知し、行動できる中間リーダー育成の枠組みが必要である。 ・教養や趣味の範疇に収まらず、学びから地域活動に繋がる人材育成の場が必要である。 ・ICT 技術がより身近になり、遠隔地からの日本語教室への参加が一般的になる。 ・イベントへ参画する。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		・税収が減少し、施設運営において市民力を活かす工夫が必要。 ・次世代を担う子どもに対する居場所づくりなど地縁組織(自治協議会)や、商店・事業所、子育て支援に興味のある人材が主体的に活動できるよう行政等と連携しながら、ネットワークを構築することが必要である。 ・この地域は人材の宝庫であり、そうした人材に、どんどん前に出てきてほしい。
⑤教育	・伝統や継承文化についての認知が希薄であり、実生活での必要性が感じられないという考え方や、心の遊びやゆとりについての教育が欠如している。 ・単身、子育て世代に自身と家族のため、健康のための食生活を伝える機会作りが困難である。 ・共に活動推進をしていく人材が増えない。 ・自然に関する指導者が減少している。 ・地域や社会を構成する人間であることの自覚が薄い。 ・大学に行くメリットは何か。学問や研究もだが、それ以外のことも意外と多いのではないか。大学に学問だけを学びに来ているのは少数である。 ・大学１年生になってからまだ一度も学校に行ったことがない。授業も一方的に見るという形である。他の人との意見交換や集まって自分の意見を述べ、他の人の意見を聞くという学びをしたい。自分のやりたいことができないオンライン授業は寂しい。Zoom の授業も少なく、先生が上げている動画や音声を見るだけである。 ・大学は授業を聞き勉強をする面もあるが、大事なことは４年間でどのような経験をし、自分がどのよ	・環境について考えた事業展開が大切であり、普段から自然を感じる「感性」を育む必要があると思う。セミナーでは俳句を作り、自然の移り変わりを感じるセミナーを行った。 ・漢字は、「くさかんむり」「あまかんむり」など自然由来のものが多く、セミナーの中で盛り込んでいきたい。 ・教育関係は、西宮市、芦屋市が手狭により、宝塚市西谷、猪名川町の西南に学園都市ができているだろう。 ・子どもたちが生まれ育ったまちに愛着を持てる学校教育を行うため、学校・家庭・地域が連携協力し、教育を行う風土・体制を整える。 ・レンジを使った安心安全(子どもも高齢者も)な調理の普及。 ・若い世代の食への関心度を高めたい。 ・命の源である食は今後も変わらず、多くの市民を巻き込み、楽しく調理し、食べる取組みの継続を目指したい。 ・市の広報などを利用して調理を行い、幼稚園や学校などにも出向き、実践すること。 ・近い将来、 子ども会組織は消滅し、公的な講習会、教室・趣味のクラブやスポーツクラブ・有料活動組織等に参加するようになると思う。 ・当会（子とも会連絡協議会）では、会費及び市補助金等で運営しているが、事業展開において会員に限定するのではなく、可能な限り全ての子ども達が参加できるよう配慮している。 ・(大学時代に学ぶことに関連し）三田市のキャンパスの学生であれば三田市の地域に飛び込んでもらいたい。三田市は学生のまちというイメージがある。学生がまちづくりをすることができるのは、町で学生が行うことを受け入れる体制が三田市にはあるからだ。私

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	うな成長をしていくのかということである。私は、大学は遊ぶ場所ではないと思うので、先生の話を聞くだけで本当に大切なことが学べるのか疑問に思う。単なる知識であれば、YouTube を見て得ることができる。このような時に、大学の真の価値は、自分のプロジェクトをやってみる、自分のやりたいと思ったことを実現させるなどの行動であると考える。ある種、生活に関することを放置し、自分のやりたいことやチャレンジしたい課題に対してコミットできるというのが大学生活の面白い所である。だから、大学の中だけで友達や知り合いが完結するのは勿体ない。一歩社会に出て、大学の外に出ることで、自分の会ったことのある大人、高校生の時に会えなかった社会人と接していくことができ、この点に大学の価値がある。 ・社会人には、大学に行っていない人、中卒、高卒など様々な人がいる。今までであれば大学に行っていないから自分の方が上だと思っていたかもしれないが、実際はそうではなく、中卒、高卒関係なく賢い人は賢く、できる人はできるということを大学生活で学んだ。大学に行くことに大きな意味があるのではなく、世の中には自身の経験が重視される場合もあり、そこがすごいと感じる。 ・三田市というのは自身の持っている知識や経験談、失敗談を語ってくれる大人が多く、学生に優しい。自身の教えたくない失敗談やアドバイスをくれるのが三田市の住民の方々の魅力である。	もこのような場を作りたいので、学生は社会に出て思い切り経験してほしい。大学生が挑戦する場所を地域で作っていき、三田市とコラボしていきたい。 ・学生は特権を持っている。社会人になると社会人と話すことができないという状況を考えた時にこのような場は大切なので、従来通りに大学のキャンパスで授業を受ける方がよい。関学ではアカデミックコモンズという学びのためであれば何をしてもよいという場所がある。このような場所で新たなイノベーション、アイディア、発想を思いつくことができる。このような場所を残していきたい。また、このような場所で新しい力が生まれるのではないかと思う。 ・都心から離れたところに住むと通学が問題になるし、どうしても学校に行けない子は家で授業が受けることができる手立てがあればよい。 ・子ども達のコミュニケーション能力は、クラブに入り、クラブの先輩、後輩の関係で高めるのではないかと思う。 ・（小学校において）スマホ、SNS の影響もあり、直接的ないじめではなく、間接的ないじめの中から救ってあげたい。近所の子に声かけを行い、アドバイスしている。母親が自分の狭い見解だけで自分の子どもを育てている気がする。子どもの気持ちに気づいて欲しい。人口構造が逆三角形となっている中で、土台（底辺）をしっかりしなくてはならない。 ・<u>社会を支えるのは子ども、一生懸命支えようという兵庫県</u>にしたい。 ・子どもには留学をさせたい。 ・大学で教育を学んでいるが、海外と比べて日本の教育は遅れているなと感じている。海外では ICT の活用が活発であるが、日本は必ずしもそうではない。そういったところにも目を向けてほしい。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・末っ子が中学１年生、コロナで卒業式もなく、中学校に入学した。近隣３校が集まり、１つの中学に進学することになった。SNS で相手が分からないまま繋がり、友達（知り合い）が一気に増え、トラブルが急増した。教室に行けない子もいる。SNS での悪口は、きりがないそうだ。誹謗中傷等で、なかなか立ち直ることができない子もいる。 ・西谷は「こども園」のモデル校になった。まちからわざわざ連れてくる親もいた。小学校の在籍人数は１クラス 10 名程度、いずれ廃校になるかもしれない。まちの人が小学校を選択でき、西谷の学校を希望する子の受け入れができたらよい。新任の先生が赴任することが多く、熱い先生が多い。 ・食育活動を通じ、交流ができ、高齢単身の人に食事作りの実践を伝えることができた。 ・家庭教育の低下が青少年や若年層による多様な犯罪、非社会的行為などに影響し、根本的な人間関係構築を阻害すると考える。 ・妻が小学校の PTA の副会長をしており、小中学校の情報を聞いている。私は同業種の先輩に色々と教えてもらった。恩恵を受けた事を自分の代で終わらせてはいけないと思う。学校では、不登校の子がいたり、いじめがあったりする。	
⑥環境・農業・食	・里山の再生を行う団体は必ずその地域の住民が中心ではない。 ・「よそ者」の集まりであるので地域との温度差が生じる。 ・地域の人にとっては何のための活動なのか理解できない場合も多	・日常の問題点を把握できる環境整備と、これをサポートする自治体との連携が必要である。 ・地元産農産物の販売をマルシェとして実施したり、大型直売所では県の都市農業ファンクラブ会員向けのイベントを開催したりしている。 ・<u>豊かな田園環境や山林等自然環境をいかした整備の推</u>

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	い。 ・里山が再生されることで復活した絶滅危惧種の盗掘が頻繁に起こっているため、保全活動の成果を十分に PR できない状況。 ・北摂里山の多くが市町の所有地であり、土地開発の際に取り残された斜面地にあるので、一般の立ち入りを禁止されている。来訪を促しにくい。（団体の活動日、開放日、イベント開催に限られている。） ・里山は財産だが、人の手が上手く入り、加工して収入になるなど、生産性を生み出すようになれば、人の意欲につながるのではないか。 ・農業の持続可能な政策や他業種からの移転政策が必要である。 ・生物多様性の実現に取り組んでいる。 ・国道 43 号線の排ガスが気になる。 ・阪神間は各市とも人口が多く、行政サービスも各市で異なるが、市民生活においての市境はほとんどない。今の市町単位では地域資源を有効に活用するうえで無駄な重複投資をしている。 ・専門ではないが、農業が一番まずいのではないかと感じている。自給率は低いが、食品ロスは世界トップクラス。だんだん引き継ぐ人もいなくなっている。兵庫県はどのような状況なのかということを疑問に思っている。 ・私は本籍地が愛媛である。そこにある土地は、昔は野菜やみかんを作っていたが、今は荒れてしまっていると思う。周りの土地も昔みかん畑だったところが現在は太陽光発電になっている。若い人は	進、地域を対象にした地区内公園化への整備、小規模の単位で幼児から高齢者までが安心して過ごせる憩いの施設の整備を行う。 ・生活環境や都市景観の整備から、自然環境は最高の地勢と言えるが、地域開発のポリシーがどのような考え方に基づいて進められているのか県と市それぞれの連携がいかに綿密にできているかという責任が問われていく。 ・食糧自給率を上げたい。 ・農業を法人組織で経営することで、生育状況の把握、重機の管理が可能になり、農家の負担が減少する。 ・地区内においては、農地畦畔（けいはん）の草刈りや黒大豆生産に係る軽作業など農業者以外の住民を雇用し、就業機会の確保と組合員との社交場としている。 ・尼崎運河の水を全部抜いてみたい。ヘドロを全部取りたい。 ・森の間伐資材を有効利用したい。 ・（生物多様性に取り組んでいる立場から）地域らしい緑、景色があるまちになればよい。 ・中央緑地が、動物がたくさんいるような森になればよい。 ・水がきれいになり、運河がきれいになり、若い世代にも良いイメージになってほしい。 ・ここ 10 年間で、運河の水が非常にきれいになった。北堀運河の水質などもきれいになっている。しかし、運河の下にたまっているヘドロについては、そのヘドロをさらって防波堤にしてはどうか。万が一津波などでヘドロが尼崎のまちに上がると、重金属などが露わになり、日本一住みたくないまちとなってしまう。 ・水自体がきれいになると、大阪のように住んでいる人のイメージも変わるし、建物を周りに建てようということにもなる。今は柵で覆われていて、川と言うよりドブのイメージ。おそらく、状況が変われば、自虐的な「尼だから」という意見も少なくなるとも思う。水が変われば住む人も変わる。 ・環境問題に関することは市町レベルでできない。県レベルで活動が必要であると考える。 ・IoT を利用しての農業などがあるが、代々引き継ぐ仕組みがないと根源的に食べ物がなくなるのではと思っている。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	みんな外に出て働いているという状況だ。それと、本社に 63 才の職員がいて、彼の親が愛媛で柿畑をやっているのでうちの会社で働きながら維持管理をして、365 日休みなく働いている。そういうことができる人はあまりいないと思う。そう思うと小さい農地を兼業でやるのは現実的には難しいし、山間部で大きな農業をやるのもなかなか難しい。そういった面で農地を守っていくというのは並大抵のことではないと感じている。 ・10 年程前に建設業も暇な時期に農業をしたらどうかという内容の講演をされた方がいた。阪神間はないが地方に行くと仕事のない時期に農業をして稼ごう、ということが全国的にあった。たまたま広島の福山でそういうことに取り組んだ建設業者がある。最初は順調に作業員の方が家で農業をしているのを会社が引き受けて一緒にやり、忙しい時期は現場で作業員として働くということをやっていたが、なかなか続かなかった。それと今は分からないが、尼崎市の工場でも水耕栽培を始めたがやめた、というところがある。 ・空き工場で水耕栽培をやっているところがあるというのは聞いている。建設業でもそのようなことを言われた時期があってちょっと頓挫している部分もあるので、なかなか農業をやるのは難しいのではという気がしている。	

３　みんながつながる、やさしいまち

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
①結婚・出産・家庭	・結婚ができないかもしれない。結婚している自分が想像できない。 ・皆さんが夢を持っていて良いなと思った。10 年後、自分の未来が見えず暗くて心配。結婚したり子どもができたりといったことが見えない。	・10 年後は 30 歳になる。その頃に子どもがほしいと思う。結婚は 27 歳くらい。子どもは３人ほしいが、年齢的にしんどいので、２人くらいになると思う。30 年後は夫のお金で暮らしている。子どもが成人して巣立っていくので、旅行にでも行きたいと思う。 ・30 歳で子どもがほしい。３年後くらいに２人目がほしい。 ・結婚はしたくないが子どもがほしい。28 歳くらいで子どもがほしい。一緒に生活がしたくない。自分の暮らす空間を壊されたくない。 ・27 歳くらいで結婚したい。自分はバリバリ働きたいので、夫が育休を取って家事も全てしてほしい。 ・主夫として生きていきたいと思っている。 ・28 歳くらいで子どもがほしい。２～３人ほしいが経済的に難しいかもしれない。奥さんには専業主婦か育休を取ってほしい。 ・30 歳で１人目の子どもがほしい。経済的な面から、子どもは１人でよいと思っている。子どもが中学生になった頃に、パートなどで働きたい。 ・教育費などにかかると思う。その他生活費がかかることを鑑みてどこを削減するか考えたとき、子どもの数を減らすことになると思う。子どもにしんどい思いをさせたくない。 ・子どもは２人ほしい。子どもを行きたい大学に行かせるとなると、お金のことも考えないといけない。子どもにはやりたいことをさせてあげたい。 ・夫は、お金持ちより、仕事をしながらでも家庭のことを考えくれる人がよい。 ・30 歳くらいで結婚し、子どもは２人ほしい。 ・30 歳くらいで子どもがほしい。<u>夫にも産休を取ってもらい、協力しながら子育てをしたい。阪神間は充実していて驚いている。子どものことを考えたとき、都会のほうが充実しているので、そちらの方がよい</u>と思う。 ・子どもを産んだ後は専業主婦になりたいが、経済的に難しいかもしれない。 ・夫も子どももいらないと思っている。仕事をして帰ったときに誰かがいることが嫌。仕事以外でのストレスを増やしたくない。働いていると子どもにきちんとした教育ができない。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		・30 歳で子どもがほしい。２～３人ほしいが相手による。お互いに育休を取って子育てをしたい。 ・30 歳くらいで子どもが２人ほしい。一人っ子が嫌だった。 ・将来についてあまり考えていない。楽しいことをしながら、平穏に過ごしていたい。地元が小豆島なので、将来は地元に帰ると思う。 ・子どもは２人ほしい。30 歳くらいまでに結婚、出産をしたい。仕事をバリバリするよりも、子どもとの時間を大切にしたいと思っている。 ・子どもには大学に行ってほしい。学ぶだけではなく、色々な人と出会い接することも大切である。 ・子どもには留学させたい。韓国に留学したが、留学したことによって広い視野を身につけられた。子どもにも広い視野を持って、こういった場で話してほしい。 ・カナダに行った。日本がよいなと思った。子どもには色々なことを経験させて、将来の選択肢を増やしてあげたい。
② 見守り・子育て	・都市部特有の少子高齢化、近隣付き合いの希薄化が進み、地域活動やボランティア活動の減少している。 ・利用者を受け身にせず、全員で参加するイベントにしていきたい。 ・共働きや定年延長の影響により、学校の見守りなどの地域のボランティアが高齢化している。 ・支援の循環を目指しているが、受け手と提供者が分化している。	・リモートでの意思疎通が可能になり、地域内での安否確認ができる。 ・登下校時の子どもの見守りが必要である。 ・高齢者の交流の場が減少しているので、街角での交流が必要である。 ・個人に対し、より細かな気配りや見守りを強化する。 ・子どもと離れて住む高齢者の親と見守りができる人とのマッチングを実現する。 ・地域全体で子育て世帯をサポートする意識を持つ。自治会活動のなかで「向こう三軒両隣」的意識の徹底を図る。 ・子どもの見守り・登下校・PTA 活動等を有償ボランティア化。 ・高齢単身者は子ども家族と日常ネットで生活見守りができると安心である。 ・現在は学生支援などをしているが、今後そのような活動がなくなったとしても、人を育む取組みは続けているだろう。 ・伊丹市が重点的に行っている安全、安心、見守りネットワーク（カメラなど）は必要である。 ・AI を活用し、アナログ化(高齢化対策）情報を簡素化する。 ・見守り体制が市内を越え、近隣市町との各種連携に繋

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		がる。 ・待機児童問題に直面しているので、子育ての選択の自由がある世の中になればよい。 ・子どもがいる。兵庫県の将来のことを考えたときに、「子どもが住みたいまち」「子どもが良い環境で育つまち」であるのか」が重要であると感じている。未来を作るのは大人ではなく、子どもである。大阪は就学支援金の増額があった。兵庫県で、就学支援金制度の確立はいつになるか聞きたい。 ・子どもが増えて、住みやすい地域にするために、何かしないといけないと考えている。川西市が教育のまちと言われればよいのだろうか。子どもが増えるような政策を兵庫県で考えてほしい。 ・若いときに叱ってもらったことが心に残っている。親が教えられなくても周りから学ぶような地域社会でありたい。 ・支援を受けた人が支援する側になり、お世話になった感覚を次の人に伝えることを大事にしたい。
③参画・公的補助	・少子高齢化が進む中で、地域で活発に活動する高齢者、アクティブシニアの存在が注目されている。 ・イベントや観光事業などでも、アクティブシニアと協働していくことが必要となっている。 ・シニアだけでなく、子育て世代(30～40 代等)が仕事や育児以外の社会的活動に参加できるよう、イベントや観光事業の PR を積極的に実施していく必要がある。 ・地域活動の担い手が高齢化、固定化している。 ・自治会等地縁組織が弱まり、活動中止など存続の危うい状況が顕著になっている。 ・子どもの医療費(中学まで無料)や給食(中学まである)については、大阪市など他地域と比べて整っている。 ・団塊の世代が地域回帰により、各施設の利用やボランティアの参加が一時的に増加したが、人手不	・地域の存続は住民だけでは成り立たないので、関わりのある方や興味がある方を巻き込む ・「子育ての困ったことを誰かに依頼したい人」と「空き時間を活用して仕事をしたい人」をつなぐマッチングシステムを導入する。 ・支援を受けるだけではなく、別のところでは支援する側になれるよう、全員が主体として参画できる社会を目指す。 ・行政や NPO は先導するだけではなく、黒子として引き出すファシリテーション力が大事である。 ・Web を活用した広報支援や IT スキルの向上対応プログラムを実施する。 ・地域での自治会活動への働きかけを拡大する。 ・行政がこのような活動を全面的に支援するために、活動資金としての足枷の少ない事業補助金を新設・拡充できるよう財源の確保を行う。 ・広域交流が促進されれば、救急医療、災害時の支援、緊急時の輸送機能が強化され、より安心したまちづくりが実現できる。 ・行政主導のまちづくりから市民や企業、行政が連携しながら地域課題の解決を図る協働のまちづくりへの転換が完了しており、新しい公共として機能している。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	足や不況により、再度仕事に戻った結果、施設での活動が減少した。 ・NPO はボランタリーマインドが大きく、ビジネスとしてファシリテーションを行うことなどへの理解が得られにくい。 ・ボランティアは身を削って活動している。活動した対価について考えることで意識も上がるのではないか。できることも増える。行政はボランティアに頼り過ぎている感じがある。 ・ボランタリーマインドで無償でも活動する気持ちでいるが、補助金、助成金は人件費として使えないので困る。事務局の人件費をつけてほしい。ひょうごボランタリープラザは全体経費の割合が決まっているが、人件費として使える。 ・なくても困らないもの、あってもなくてもどちらでもよいものは淘汰されていく。 ・尼崎市で消防団に入っているが、行事の９割が必要ないと感じている。視察のための訓練などは必要ないと思う。	・画一的な施策展開ではなく、地域ごとの実情に応じた取組みを実施する。 ・移動を１つのまとまったサービスとして提供し、１人１人のニーズに沿った事業を組み立てる。 ・<u>個人の思い及び意見が尊重され、地域づくりが難しくなるが、「喜び・やりがいが感じられる」ことには人は動くので、行政の役割を市民に分担することなどの行政支援のもとに実施</u>する方法を検討する。 ・マイナンバーの行政手続きを簡素化する。 ・<u>ICT などの発達によって、行政が線引きした地域の概念はなくなるかもしれない</u>。 ・阪神南と阪神北の区分、中播磨、東播磨、西播磨、北播磨の区分などがなくなっていくなど、<u>行政による線引きが薄くなっていく</u>と思う。 ・地域に帰ってくる人材をつくる。 ・市民力を活用する。民間競争をするべきである。 ・減少した人口を想定して、公共施設を整備すべき。 ・近隣市町との情報共有を図る。 ・学校、その他団体との連携が必要である。 ・地域団体と事業者（NPO など）連携による取組みで地域社会が充実できる。 ・行政は、人口減少で財政難になるため、一層の事務の効率化、IT 化の推進で、職員の負担を減らす。 ・地域での解決策を地域で共有する。 ・公を頼らず、各々が一隅を照らす気持ちで社会貢献をする。 ・市町合併における公共施設の統合化・合併による減少を誘引する。 ・行政は「心」を中心としたソフトの対応を中心にする必要がある。 ・行政は仕組みや制度を構築するが、実践は住民が行うという意識改革を行う。 ・医療、介護、従事者（看護師、介護職員など）への経済的支援を行う。 ・共通のビジョンを持つこと、そのためのステップを作ること。それらを踏まえて各自の役割や強みをいかして活動する。 ・<u>自助、共助、公助の三助が言われているが、活動の基本は自助であり、交流こそが共助であり、費用の問題で公助</u>の補助金を受けることによって、目的を達成できる。制度を利用して邁進したい。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		・イベントに参加して PR 活動をする。 ・産学官連携の機会を作り、多世代の意見交換ができる場所が増えたらよい。 ・これからはきめの細かい、公、私の協力体制が必要となってくると思われる。住宅環境も十分な土地の確保等の利点もあるだろうと思われる。 ・行政でカバーできないところは、市民団体でカバーする。 ・本来、皆ボランティアはやりたいことである。業にならずとも、今日のご飯を食べられるくらいの報酬があれば、違うところで稼いでボランティアに注力するのではなく、ボランティアとしての動きが強くなると思う。 ・西宮市、尼崎市と協力し、小学校で「バスふれあい体験」を実施している。 ・助成金がなくなれば活動ができない。次につなげる方法はないか。県レベルでできる事はないか考えることが大切である。 ・ソフト事業に対しての理解が必要である。空き店舗など、活動の場所として使えるところを調整してもらうだけでも活動者は助かる。営利目的でなく市町を超えてハードではなくソフトな支援が必要である。会社の維持には膨大な無償労働がかかる。 ・NPO を立ち上げ、事業をやりたいと相談を受けた方には、固定費を押さえるため、最後まで固定の場所を持たないようにとアドバイスをしている。空き店舗のマッチングを県と一緒にやってもらったら助かる。
④世代間交流	・交流はボランティア活動の基本行為であり、各地区で他方面にわたって実施したが、単発的で一過性であった。 ・若い人が楽しそうと思えば活動には参加してくれる。PTA も積極的に盛り上げる役員がいると、翌年は役員の選出はくじではなく立候補で役員が決まるので、活動的な人を巻き込みたいが、忙しい人が多いので難しい。 ・イベント参加者の多くが祖父母と孫世代で、中間年齢層の若者・親世代の参加が少ない	・多自然地域にどう人を呼び込むかを考える必要性がある。 ・プライバシーを配慮した多様な地域ネットワーク社会を推進する。 ・子どもの数が減少しているが、地域の大人、高齢者を含めた行事を行い、地域の活性化を推進する。 ・食物店・飲食店のみが有利なまちにならないこと。 ・市民自体の有り様を考え直す。 ・最近は表札を出さずに戸を閉め切っている家が多くあるが、より出入自由な交流ができる家が増加するとよい。 ・核家族の解消のために、地域内での世代間交流をする。これにより、地域トラブルが減少する。 ・誰もが自由に集える雰囲気作りを行う（自由参加）。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・地域の清掃に参加しても交流がない。	・世帯単位の地域活動参加から、個人単位の地域参加を増やす。 ・ジェンダー教育の視点はこれからも必要である。 ・各地域への声掛けを行う。 ・活動内容の見直しを行う。 ・団塊世代が互助的にすればよいというが、互助になっていない。
⑤外国人との相互理解	・外国人と日本人、または外国人同士が交流できる機会や場が十分でない。 ・外国人を支援対象として扱うばかりでは外国人の自己肯定感が低下するので、社会参画を促し、自身も社会の構成員の一員であると意識づける必要性がある。 ・外国にルーツのある児童や生徒に対し、日本語学習と、母語や母国文化の継承の両立が必要である。 ・副代表をしている。神戸大学大学院で、政治学を研究している。論文のテーマは、移民の幸福について。出身はブラジル。母国との違いを感じる点は、日本では、学生の頃から画一的に教育されており、箱に入っている印象がある点。周りと同じように考え、表現するように教育されている。ブラジルでは、自然と個性がプラスされる。 ・日本では、中途半端な日本語では、情報を得るのが難しいと感じる。例えば、他言語の表示があるが、英語を選択すると、情報量が日本語表示の半分くらいになってしまう。 ・ロシアから来ている。大阪でエステティシャンとして働いている。子どもは２人おり、浜風小学校に通っている。子どもの勉強のことについて、日本ではサポートが手厚くて助かる。ロシアでは全て独	・文化や環境の違いを相互理解し、トラブルを未然に防ぐ。 ・外国人のゴミや音のトラブルについて、日本の習慣を最初に知ってもらう努力。（特にゴミは市町によって制度が異なるので困難） ・外国人労働者の子ども達が活躍する地域社会で、コミュニティの力で摩擦を軽減できるようになればよい。 ・ベトナムの留学生、実習生を２年前から受け入れ、地域の防災活動に参加している。 ・地域活動において外国人住民の参加を今まで以上に呼びかけることにより、日本人住民にとって次世代の地域活動の担い手が見つかり、外国人住民にとっては自己実現の場となる。 ・外国人県民と日本人は対等な関係であること。 ・外国人県民を支援するという考え方ではなく、外国人県民に学ぶという姿勢が大切。これが多文化共生。 ・外国人県民は将来的には増える。 ・外国人県民から学んで地域社会に活かせることも多い。 ・外国人県民へのアプローチが色々あることが大切。 ・外国人県民との交流パーティーが、神戸市で定期的に開催されているので、参加してコミュニケーションを深めている。 ・“外国語が話せなくても「やさしい日本語」を用いれば外国人とお話しできる”ということを日本人に PR し、参加者を募集している。 ・外国人支援団体と行政が連携し、作り手として外国人にも参加を促しながら交流の場や日本と外国の双方の文化・習慣の学ぶ機会を創出する。 ・外国にルーツのある児童・生徒について、学校側の支援体制の整備や、母語支援員の派遣時間の増加等について、国・県レベルでの支援策を行う。 ・枠にとらわれない連携が必要である。 ・NPO など、比較的自由に活動できる団体がつなぎ役を

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	力でしている感じがする。 ・ロシア出身。ロシアに製品を輸出する仕事に従事している。日本には12年くらい住んでいる。 ・20年以上住んでおり、帰化している。これまで商社、コンサル、メーカー勤務などをしてきた。今は、コンサルタントと貿易関係の仕事に従事している。今までで困ったことは色々とある。市民ベースでは地域住民として扱ってくれるが、「しょ」の付くところ（役所、裁判所、警察署等）では、横柄な態度をされたこともあった。おそらく、日本では、「共生」という考え方が薄い。 ・日本で10年住んでいる。2002年に初回で日本に来た際、通訳士やサポートしてくれる人はいなかった。仕事を探すのが難しかったし、外国人に休日や権利があるかどうかも分からなかった。2回目に日本に来た際、楽しかった。通訳士もいたし、子どもが学校に慣れるためのサポートもあった。病院に行くときも、通訳士のサポートもあった。市役所にも行きやすかった。 ・日本人は助けてくれる。道を教えてくれるとき、「一緒に行きましょうか」などと言ってくれる。一方、近所の人からは、私たちが日本語を勉強する気持ちがないのかと思われていると感じることがある。勉強したい気持ちはあるのだが、仕事をするのが一番なのでどうしても後回しになってしまう。この点は理解してほしい。 ・学校で気になったのは、日本人はほかの国のことをあまり知らないと言うこと。アメリカにしか興	担う。 ・外国の子どもの学習塾、大人の日本語教室など学習だけでなく様々な分野での相談のつなぎ役をしている。（教委、子育て、自治会、生活支援） ・外国人県民とは対等に接する。まちづくりに関しても、外国人県民の出身地での知見など、学ぶことが多い。外国人県民には、日本人にはないスキルを持っている人が多い。 ・まちづくり分野でもチャリティ活動などは外国人県民の方が、日本人よりも上手である。 ・外国人県民と日本人の会合を行う際、日本人（あるいは行政）への要望を聞くための会になりがちであるが、外国人県民が地域をどうしたいかなどの意見に耳を傾けるようにする。 ・外国の人が森や市内、色々なところに多く来てほしい。そういうことが当たり前の風景になればよい。 ・外国について、アメリカ以外にも興味を持ってほしい。 ・外国人であるからと言って、見た目で判断せずに、交流してもらえるとよい。 ・日常的に、色々な言語で暮らせるようになればよい。 ・入学の際、色々な言語で受験できればよい。 ・当団体では、中学生の受験指導をしている。当団体に初めて来たときは「外国人への支援」という考え方が私にはあったが、その後、「お互いに支えあう」という発想が大切であるとわかった。 ・（外国人県民の方の中には地域の中で何かできることを模索している人もいるので）、一緒に地域活動をしていければよい。 ・他国の言葉を知りたいと考えるのは、人間対人間の関係があるから。まずは関係性が重要。私たちも、外国の文化に飛び込んでいく必要がある。 ・多文化共生の前に、交流がある。交流があっての共生であると言える。 ・個人としては、教育が大切であると感じる。日本人も外国人も、柔軟性がある小さいときに色々と触れることが大切。何かで読んだことがあるが、人間は異なるものを排除する性質があるようだ。ただし、人間というレベルではみな同じであるはず。外国人のみならず、障害者の問題にも当てはまるかもしれないが、見かけで判断してはならない。もとを正せば人間であるということを認識するのが大切ではないか。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	味が無い。（母国なので）私がスペインのことを話していても、興味がなさそうであり、寂しい。 ・スペインから来た。飛行機のエンジンに関係のある仕事をしている。日本に来て良かったのは、子どもの勉強に対して厳しいところと、伝統があること。スペインでは、病院が無料であるが、日本では有料なのが驚いた。 ・日本にいて困ったことはあまりない。あえて言えば、母は日本語がわからないので、全部私が通訳する。 ・日本国籍がないから、あまり日本人と同じことができない。外国人であることによって、差別ではないが、私たちと関わるのをやめようと思っていると感じるときがある。見た目で判断されると寂しい。 ・大学でポルトガル語学科に在籍している。 ・日本生まれ、日本育ちである。50数年、日本にいる。ドライバーをしている。2050年を見据えて色々と考える際、まずは目先の問題にも対処していかないといけない。 ・中国では芦屋市に住んでいるだけで憧れがある。税金が高いのではないかとか、上品すぎて住みにくいのではないかとも言われる。 ・免許更新の際、妻は日本語がわからないので困った。 ・日本語ボランティアを2004年から2006年まで別のところで行い、そこからは15～16年くらい、当団体に関わってきた。当団体の変化としては、当然のことながらメンバーが変わったこと。また、	・10年先には、会議では）会場の真ん中にイヤホンを置いて、自動翻訳を通して、話し手と聞き手が問題なく意思疎通できるようになっていると思う。 ・日本人のシャイな気持ちをどう扱っているか。小学校に外国人がいることに対して、恥ずかしがるのではなく、ラッキーと感じること。自分にプラスになるという感覚が大切。 ・学校教育自体の取組みも何とかしていかないといけない。 ・距離を縮めれば、心と心で分かってくる。遠慮していてはいけない。 ・（地域で活動をしたいと考えている外国人県民について）そうした人たちを近づけていくのが、当団体のような私たちの役目。 ・学校で剣道部とか部活動があるが、外国人のクラブのようなものはない。そういうクラブがあれば、言語など、お互いに学びあえると思う。 ・地域の活動を外に広げていくことが大切である。 ・日本人も外国人も、支えあいながら暮らしていくことが重要。言葉より先に大切なのは、違う世界に飛び込むこと。日本人はシャイだから、飛び込みたいと思ってくれるようになればよい。 ・外国人県民に選挙権があれば、外国人における地域とのつながりという点で、非常に大きい。私の住んでいる芦屋市が着手すれば、国際都市として世界中から注目されることとなる。 ・<u>永住権を持っている人が、選挙権を持つこと</u>は重要なことである。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	今は子どもが多くなってきた。社会の縮図と言える。多文化共生については、以前は、国や研究機関のレベルでしか使われていない言葉であったが、最近では私たちボランティアのレベルにまで広まってきている。今が、多文化共生のスタート地点であると感じる。 ・３年前に会社を退職して、２年くらい前から当団体に携わっている。数学など理系の勉強を子どもたちに教えている。日本語でとまってしまう子どももいる。言葉の問題を感じる。 ・近所に、想像以上に外国人が住んでいて驚いた。単に、言葉や料理を教えてもらうだけではなく、生き方を教えてもらったという印象がある。ストレスが減り、健康的に生きていける。一緒に楽しむことが重要。私たちがしてあげられることはないかもしれないけれど、外国に行かなくても、こうした海外文化に触れることができるのはチャンスかもしれない。 ・文化などと併せて、外国の人のことを感じられるのは楽しい。お互い支えながらやっていく。外国人の中には、地域の中で何かできることを模索している人もいる。 ・メールで会員の方に案内した際、漢字とふりがなの両方で連絡するのだが、皆さんに理解してもらっているかが不安。投げかけてもレスポンスがないことや、今日でも時間ぎりぎりまで皆さんが集まらないことなど、日本文化に長くいる私にとっては不安に感じる。 ・日本人は、何でも考えすぎである。	

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・日本語学校に通っていた際は、教える側とは何となく心理的な距離を感じた。当団体では、距離が近い。 ・地域で色々としたいと感じている外国人の人が多いということ感じる。 ・ラテン系の人たちは、いつも心の距離を近づけようとしている。学校でも、言葉、文化、ダンスなどを教えたいという気持ちがある。仕事をし始めたときは言葉がわからなかったけれども、気持ちを近づけようとすればジェスチャーなどを通して伝わるものだ。 ・編み物などは家でコツコツとしている。日本語の問題もあるので、人に教えるまではいかない。 ・世界中から人が集まっている。学ぶための良いチャンスである。 ・ロシアの餃子を作る会を開いたロシアの方もいる。単に作り方のみならず、こういう風に食べるとか、こういう風に食卓を囲むとか、色々なことを教えてくれた。どのように楽しむか、どのように生きるかなどについて勉強になった。 ・多文化共生を考えるとき、どれだけ市政に反映されるかが大切。最高裁判所の平成７年判決において、永住資格を得ている定住外国人に選挙権を与えることは、市町村レベルでは禁止されていないとされている。実際には、選挙権を与えている市町村はない。 ・女性参政権が与えられたのは 75 年ほど前のこと。 ・外国人が日本に入ってくることについて、私はよいと思えない。怖いイメージがある。日本の魅力を	

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	知ってもらうのはよいことではあるが。	
⑥少子高齢化	・活動の後継者がいないことも問題である。 ・ニュータウンで高齢化が進んでいる。 ・農業ボランティアに入ったが、高齢者が多く若者が非常に少ない。60 歳以上の高齢者が息を切らして活動している。三田市は自然豊かである。環境を守りつつ、定年退職後どうするか。高齢者が引きこもることもある。 ・配達しながら安否の確認、ケアマネージャーや家族に報告しなければならない。 ・高齢者の交流の場が減少し、街角での交流が必要である。 ・交流のために植木やベンチが必要である。 ・芦屋の奥池周辺でも高齢化が進み、空き家も増えている。 ・活動の後継者がいないことにも問題である。裕福な若者などはおらず、時間もお金も集まらず、結局高齢化している。「持ち出しのお金を出してまで人のために動くのか」との疑問もあり、役に立ちたいけど･･･という意識の狭間でモヤモヤしている。 ・スポーツインストラクターをやっているが、スポーツジムの会員も高齢化している。平日に集まると高齢の方が多いが、得るものはある。いろんな集まりに参加して聞くだけで価値がある。 ・ニュータウンで高齢化が進んでいる。このため、子どもを巻き込んで「ふるさとづくり」を行っている。しかしながら、ニュータウンには伝統行事がないことから、人	・高齢者の安全施策として乗用者の自動運転や安全補助機能を充実させる。 ・<u>更なる少子高齢化に備え、高齢者が働きやすい、子どもを育てやすいまちや制度を作ってもらえればよい</u>。 ・高齢化社会にとって生活基盤の中に安心・安全を確保する。 ・地域内での世代間交流に高齢者を活用する。 ・高齢者、独居老人対策が必要である。 ・「世代交代」を待つのみ。 ・比較的大きめの家の建設、高所得者向けの住宅地開発が可能なのではないかと思う。 ・人口減少と同時に高齢化も進んでいる。そのような人々が使いやすい運動施設（テニスコート、多目的広場）を新たに開発できるのではないか。 ・午前中は、仕事をリタイアした高齢者世代が、午後は子どもや家族連れが利用する環境を整えれば、全ての世代がその施設を楽しく使用することができると思う。 ・間近に 2025 年問題を抱え高齢者の自立した生活支援対策について行政だけでは間に合わないことは明白で、<u>地域社会としてコミュニティの仕組みづくりが成熟している社会</u>になる必要がある。 ・高齢化が進み、空き家も増えている芦屋の奥池周辺では、空き家を活用した喫茶店など、地域コミュニティを形成する仕組みが必要かもしれない。 ・（高齢者の安否確認等と関連し）事務的なことはリモートでできるが、リモートと非リモート、現場でできる事とできない事の整理ができれば高齢化のところでも上手く使えると思う。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	と人のつながりを維持していくことが難しい。 ・65 歳で自治会の班長をすることになったが、会社勤めをしていると時間がなくできなかっただろう。70 歳を超えて年金をもらうのと、60 歳で年金をもらうのは大きな違いがある。20 年後のことを考えると、東京にいる子どもは 70 歳まで働かないといけないのではないかと言う。農業ボランティアに入ったが、年寄りが多く若年が非常に少ない。60 歳以上の高齢者が息を切らして活動している。三田市は自然豊かである。環境を守りつつ、定年退職後どうするか。高齢者が引きこもることもある。 ・高齢者へ弁当の配達をしている。リモートは難しい。配達しながら高齢者の安否確認をしつつ、必要に応じてケアマネージャーや家族に報告しなければならない。特に桜台や五月台辺りは高齢化が進んでいる。	
⑦ユニバーサルデザイン	・バリアフリー設備や LGBT 当事者も使いやすい施設の整備が求められている。 ・交流の場所である公立施設の老朽化問題がある。	・誰もが利用しやすいユニバーサルデザインの施設や設備の整備が必要である。 ・最近、らくらくフォンを利用した。手が震える方などにはスマホは使いにくく、強めに押さないと反応しないのがよい。自分で発信できるようにアドバイス、出張サービスなど、家で使えるようにできたらよいと思う。
⑧つながり	・孤独死や空き家の対策が必要である。 ・非正規雇用に伴う賃金格差の問題がある。 ・生活困窮による要援護児童・生徒が増加している。 ・外国人などいわゆる「弱者」に対し、今回の新型コロナウイルスを含め自然災害などの対応が十分	・地元、よそ者、若者、先入観、固定観念、わだかまり、思い込み、誤解などを常に意識しながら協働、話し合い、会話と発信を行う。 ・施設が、こども食堂や様々なサークル活動の場となっている。 ・少人数の子ども達と自然にふれあい、輪を広げていく取組みを行う。 ・自治会の加入率向上のため、加入向上を図るとともに、役員の新陳代謝が必要である。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	に行き渡らない。 ・現場に行くことを心掛けている。行政、民間に関わらず、公表された情報に基づいて行動することが多い。当団体では現場に出向くことで、例えば、相手方の趣味、家族構成、人間関係などの多くの情報を得ることができる。 ・市内の全てのNPO等団体に、２年に１度は伺うようにしている。訪問によって、解散している団体、登記のない団体などが判明する。また、「うちの理事長が亡くなって、その後どうすればよいか。」などの相談も受ける。 ・行政からの通知（要請）は自治会を窓口にできるが、非自治会員への情報伝達に支障がある。 ・以前は集落の周りに農地や耕作地が広がり、住人は農家の人たちがほとんどであった。今は、職業も知らない人達が集落の中に生活しているため、挨拶はするが交流する事はあまりない。 ・「〇〇CAFE」からプチレッスンで自分を披露し、そこから広がり、イベントを行っている方もいる。 ・顔を合わせていないと、人が埋もれていく。 ・年２回市内全自治会による地域清掃としてクリーン作戦は定着したが、参加者が高齢者中心のため、学校等の学生や若年層の参加体制をつくる必要がある。 ・地域役員も高齢化傾向にあり、交代しにくい。 ・行政から当団体の活動の仕組みについて褒められることが多い。営業活動して広告費を徴収し、住民に還元している活動は珍しいようだ。我々の活動内容を聞いても	・テクノロジーを活用し、他との繋がりを保ち、地域で孤立しないような取組みが必要である。 ・市民が市内の団体の活動内容を知ることができ、気軽に活動に参加できるような環境づくりを進める必要がある。 ・リアルタイムで画像や動画を使い、自宅で簡単にできるコミュニケーション手段を確立する。 ・広報誌やホームページ、チラシなどの従来の手法だけでなくICTを活用した新たな情報発信を行う。 ・つどいの場づくり。（例えば地域交流カフェや地域ふれ愛福祉サロン、こどもの居場所などのつどい場） ・各小学校区単位や、自治会単位での交流事業に対して支援する。（赤い羽根共同募金の配分金や歳末助け合い運動配分金などによる支援、コミュニティワーカーによる活動支援など） ・井戸端会議を15年間続けているが、Zoomに置き換えは困難である。リアルな繋がりが今後も活きる。 ・１つのコミュニティに１つのカフェがあるくらいが有効である。 ・市町単位（自国主義）ではなく、「阪神共和国」で連携できればよい。 ・人づくりを念頭に施策を展開する必要がある。 ・地域における文化や伝統の承継や地域社会と住民とのコミュニティづくりの強化が図られるような取組みや行政施策が必要である。 ・イベントにおける交流が必要である。 ・オンライン会議などが増える中で、人と会う価値が上がる。 ・地域、社会、行政で安心安全をもたらす居場所、生きがいを創り出す行事等をもっと多くする。行政主体で考えてほしい。 ・自治会で廃品回収をして収入を得て、それを資金にお祭りや公園の整備をしているが、必要性をアピールしたい。 ・挨拶・情報交換が必要である。 ・人との繋がりが地域へ広がり、見守り体制の構築ができる。 ・一次相談者（窓口）となりNPOや自治体に情報を伝達する。 ・地域コミュニティを再生する。 ・日中は、地域の方は仕事に出て不在にしている。一斉

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	らう機会を設けてもらいたい。 ・尼崎は熱い人がたくさんいて色々なことに取り組んでいるが、なかなか市民には行き渡っていない。 ・共創というスローガンを掲げ、地域との連携や他団体との交流を図ってきた。地域活性化のために、手を取り合えることが大いにあると感じた。 ・共助については、恐らくこれから30 年我々自身も活動の課題になると考える。西宮は住みたいまちと言われるように、快適で魅力的なまちとしてあげられるが、住環境を支えるのは、地域の自治会や地縁団体といった地域コミュニティである。ただ、それらの団体も永続的に発展するわけではなくて、構成員の減少や高齢化といった様々な課題を抱えている。 ・地域で活動する様々な団体が、組織の維持、拡大に取り組んでいるが、自治会は高齢化が進み、担い手も減っている。 ・創造的市民社会の今後の主な課題というところについて、今は高齢化がどんどん進んでいる。また、未婚化が進むと当たり前だが少子化が進む。すると社会福祉協議会、民生委員、主任児童委員とか保護司等の社会の安心安全を担保する担い手が減少していくのではないかと心配している。昨日も市から保護司になれそうな方を紹介してもらってお願いに行ったが厳しそうだった。昔は地縁もあり、地域の有力者の方から保護司をしてもらえませんかとお願いされることもあったが、今はなくなってしまっている。今は女性も社会に進出しているし、なか	清掃の日のような半分強制的な行事があるなか、仕事と同じように地域活動の地位が上がる必要がある。または仕事に出ている地域において、その地域のために活動を推進していく。 ・将来、超高齢化社会の到来とともに、担い手不足によって自治会活動は衰退をたどる。現在は、災害時の対応について共助の部分において自治会の役割が大きいが、それは将来期待できなくなる。 ・自治会活動が衰退すれば、住民と、地域に根差さない単身赴任者や学生といった一時的な地域住民との災害時の対応力は差がなくなり、すべてにおいて共助が期待できなくなり、公助と自助のみになっていきかねない。地域や社会や行政は、新しい共助のある社会を模索する取組みが必要である。 ・地域での生活上必要な絶対条件は安全なまちで、そのための必要な条件は、綺麗なまち。犯罪は起きにくくなる。また、地域のコミュニティが良いまちは災害に強い。 ・コミュニティの情報発信は、回覧板や学校で配布される文書、ブログ更新など、広く実施されている。住民がそれを情報として受け取っているか疑問である。 ・地区内マンションの管理組合と戸建て住民との防災活動の連携が弱く避難所運営についても統一した運営の認識ができていない。 ・身近な距離感の人達とのつながりは強くしていきつつ、オンラインに代表されるような弱いつながりの人達を増やしていくことで、「私の関係人口」を「濃く・多く」していくことができる。 ・住民たちは、関西はアイディアが出せる地域であることを意識する必要がある。 ・非常時には、お互い様で助け合えるつながりのある社会であって欲しい。 ・お金を使うことなく、ふらっと出かけて知り合いがいればよい。会うことがきっかけで活動に繋がることもある。 ・将来は近隣地域で活動する同じような団体と連携していきたい。そのような団体があれば教えてほしいし繋がりたい。期待している。 ・世代間の交流が一層進めばよい。 ・30 年後には、年齢に縛られないフラットな感じになれば、何か活動をするにしてもおもしろい。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	なか受け入れる人がいない。 ・地域活動に参加したいと思う若者の割合がだいぶ少ないという調査をみた。 ・高齢層を中心にムラ意識が根強いが、次世代層は市町などの自治体単位を超えて連携する動きが活発である。 ・ハロウィンのイベントでは地域の企業とつながり、ママがスタッフとなり、パパも参加するなどし、規模も２千人となった。	・住民が集まる場に行政の方が来て話を聞いてほしい。想いが伝わると事業がやりやすくなると考える。つながる事が大事である。 ・能動的に PR する技術を習得する必要があると思うので、他の府県に負けないよう注目してもらうために、コミュニケーションのトレーニングが必要ではないか。引きこもりでコミュニケーションが苦手な人が取り残されないようにすることが大事だと思う。 ・地域の未来は私たちがつくっていくという、地域の人たちが当事者意識を持って、地域の繋がりを強めていかなければ、共助が機能せずに、自然災害に直面したときに苦労する可能性がある。課題を解決するために、まちの人たちの繋がりをつくっていくことが必要である。行政だけでなく、我々市民が自ら動き出すことが大事である。 ・人と出会うことで交流が生まれ、活性化に繋がる。 ・<u>人々の交流</u>が進めばと思う。 ・子どもや大人、高齢者、障害者と交流し、充足感を得ていた。人と顔を合わすことで得られる充足感を失わない社会であるよう、尽力していかないといけない。 ・副知事の挨拶で参画という言葉を聞いてハッとしたが、地域づくりにおいて、<u>若者が意思決定段階から参画する</u>のがまちにとってのインパクトに繋がるのではと思う。将来構想研究会のスライドにも、若者こそ多自然地域にとある。課題が山積しているところに、若者の力が必要である。まちづくりに是非若者、特に大学生の力を活用してはと強く感じた。
⑨福祉	・施設利用者が園芸作業中は、近所の人と挨拶する。 ・介護業界のマンパワー不足だが、介護職員の処遇改善により収入がアップした。 ・次世代の担い手がいない。 ・若い人が自治会のニーズを感じていない。 ・高齢者サービスは財政面からも厳しい。施設入所の基準は要介護２から要介護３になり、介護予防サービスは市町に移っている。市町の財政力の差が出る。一定の質が確保できないといけない。介護予	・地域の Facebook があればよいと思っている。 ・介護に興味がある人を増やすことが必要である。 ・地域の方の顔と顔がつながる場面づくりをしていきたい。 ・人にあわせて枠組みを作る。 ・<u>個性や思いを尊重できる社会</u>であればよい。 ・ニーズの多様化により、個人に深く向き合える社会であればよい。 ・数としての実績ではなく、誰か一人のためになることであっても評価されるとよい。 ・親の介護が必要になったときは施設に入れたい。 ・親と同居して介護することも考えなければならない。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	防サービスの支出が、介護保険波の支出がいつまで続くか疑問である。 ・訪問介護を在宅介護サービスの担い手としてどこまで使うか。財源の問題で、生活援助から身体介護に移っていないか。 ・住みたい街ランキングの上位に選ばれているが、貧困層が増えている。家庭の経済事情で子どもの人生が変わってくる。 ・地域一環の施設として、見てもらえるようにしないといけない。近隣住民が困ったときの助けとなる存在になれればよい。 ・介護の問題がある。簡単に施設に入れればよいとは思えない。田舎では介護士の手が回っていない状況。交通手段も無くなっている。どんどん住みにくくなっている。 ・認知症介護の啓蒙活動をしている。全国的な話になるが、30 年後、65 歳以上の約３割が認知症患者になる。現状で５人に１人は認知症である。高齢者の年金が少なくなり、介護を受けると同時に生活保護の申請をする方もいる。現役世代の方は親の介護もしないといけないが、自身の介護に備えないといけない。兵庫県の財政を考えた時、経済規模の縮小もあり税収入も減っているだろう。30 年後、私たちが介護を受ける時、現状の高齢者と同じ水準でサービスを受けることができるか心配である。 ・地元が田舎なので、両親のことを考えると帰らなければならないという気持ちもあるが、何もなく、帰りたいと思えない。	

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
⑩情報通信・技術	・人や地域のつながりがテクノロジーの進化でどのように変化するか想像がつかない。 ・若者は IT、テクノロジー関連業種に就業希望がある。 ・行き過ぎたコンパクトシティは郊外の自治機能の崩壊を助長し、社会資本が流出する可能性が高い。 ・以前、公民館で事業を行っている方の応援ができたらと講師を呼んでプチレッスンを行ったが、コロナ禍でオンラインズーム会議にしている。オンライン会議は、子どもがいる人や、帰宅してから公民館に出向くと間に合わない方が事務所から参加できるなど好評である。 ・議会の傍聴に行ったら、「支援が必要な高齢者の方に災害用のタブレットを貸し出す」と言っていた。アラートが配信できるようだ。 ・ライン等の操作方法について一緒に教えてもらうのをセットすればよいのではないか。 ・当団体は４人で運営している。お店を経営している方とショップ会員の話を聞いていると、名刺を持っていない、フェイスブックの使い方が分からないと聞き、ミーティングを開いた。困ったことについてお手伝いしている。 ・エアラジオ（YouTube 動画）でお店の料理を紹介しつつ、情報を発信している。地域と交流したいとの要望があり、川西市の寺とカフェを開催した。オンライン、ホームページ、ブログ、Instagram、Facebook、Twitter で情報発信をしている。先日は NHK が特集してくれた。小さい団体でも活動を知	・トヨタの「ウーブン・シティ」にあるような、社会のつながりがあらゆるモノやサービスにつながる「コネクティッド・シティ」。 ・ICT や科学技術などを活用し、業務を合理化する。 ・テクノロジーの補助、研究、交流、つながりなどを行政がとりもってほしい。 ・テレワーク、テクノロジー、ドローンの配達導入などで都市集中でなく、地域社会の機能低下を守り、北部の過疎化を防止できないか。 ・広く意見を聞くためにリアルタイムの情報発信や共有のために ICT 活用を深めることが重要である。 ・AI とテクノロジーの進歩で、身体機能・知覚能力の増加など生涯健康を維持するための社会生活を補助できる機械を開発する。 ・IT や AI の活用による生産性の向上に伴い、所得が増加する取組みを行う。 ・１人１台スマートフオンを持つ時代が目の前にきていることから、開発されたテクノロジーや各社が独自で行っている MaaS の実証実験等を地域、社会、行政が三位一体で運営し、一体感のあるものになればよいと思う。 ・中心市街地居住によるコンパクトシティを実現させる。 ・既存ストックの状況に合わせたコンパクトなまちづくりへと発想を転換するとともに、都市機能の無秩序な配置を排し、広域的サービスを担う商業、行政、医療、文化等の諸機能の立地を集約化する。また、自家用自動車に依存しない都市構造を目指していく必要がある。 ・ドローンを利用した配達を行う。 ・高速通信を整備する。 ・インターネットの環境が充実するとよい。 ・IT 時代でデジタル化が進んでいく。デジタル化に対応できる専門家の育成が必要である。ライフラインとして整備されるには、相談窓口があると助かる。パソコンの活用やインフラ整備について、町医者のようなイメージで、エンジニアが相談にのってくれる窓口があると心強い。 ・紙での文書ではなく、PDF ファイルでの通知や情報交換、電気自動車、バスの普及、持続可能エネルギーによる発電が進めば環境への負荷が小さくなる。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	ってほしい。行政の方に活動を知ってほしい。猪名川町にはこの場所の使用について調整してもらったし、今までにイベントの場所を確保してもらったこともある。 ・私の家の隣にドイツ人が住んでいる。ポケトークで問題なく会話できている。ポケトークはすごく便利。 ・5G の普及などの情報通信技術の一層の発達が想定される。 ・宝塚市で活動している。社会が変化し、リモートワークが進んだ。中小企業でも全国的に戦える力があり、活躍できるチャンスもある。 ・コロナでテレワークが加速している。大前提は通信インフラがどれだけ充実しているか。各家庭の格差やインフラを繋げないなどが問題になるが、テレワークが進むと兵庫県でなくてもどこに住んでもよい。住む場所を選ぶとなると通信環境が重要になる。 ・リモートが発展していくことで、今、会社の団結力が良い状況であっても、同じ状況に保つことはできない。実際に通勤しているからこそできることはある。例えば、同僚、同級生、先輩や後輩などの繋がりは自身が仕事をしていく上でのモチベーションに繋がる大事なものである。これがリモートになると、Zoom などコミュニケーションツールを利用することで交流は可能だが、今までのようなフレンドリーな関係や会社の中での信頼関係が築けないなど、繋がりが薄くなるというデメリットがある。 ・これから 5G をどうしていくか。	・今後進展が見込まれる 5G などの情報通信技術を活用し、顧客との接点を持っていきたい。 ・以前授業で、リモートでこれからどう変わっていくかを考えた時に、リモートは便利なプラスの面が多いと思った。例えば、姉が今年就職活動をしていたが、片方の条件はよいがもう片方の条件が悪いからということで、両条件を比較した結果、マイナス面が理由にやめてしまうという話を聞くので、これからリモート会議がより活性化していくことで、親の介護など何らかの事情で、本当は働きたいけど働くことができない、才能があるのにも関わらず遠くまで行くことができないため働くことができないという人へのサポートに繋がる。個人と会社の両方のメリットにもなるというプラス面があるのではないかと考える。 ・（大学について）オンラインなどが進展し、どこの大学、どこの先生の授業でもオンラインでできるという状況になり大学に行かなくてもよいぐらいになれば、大学進学率は下がるだろう。大学に行かず、他のことをする。このような状況になれば、大学のあり方や形態はこれから変化し、今は偏差値で評価されているが、例えば関学であれば「きれいな外観、キャンプができるキャンパス」というような点で評価がされるなど、評価基準が変化する。人とのコミュニケーションが薄れると言っていたが、本当にそれが問題なのだろうか。 ・5G の普及による新たな取組みと、人と人とのふれあいとのハイブリットで、子どもたちの成長に取り組んでいきたい。 ・今後は、5G という超高速通信技術が導入され、Web 会議もますますスマートな方向に進化していくことが予想される。もちろん私たちも、対面の良さは活かしつつ、積極的なテクノロジー導入に向けてもっと検討していきたい。 ・全ての会議で導入するのは難しいと思うが、Web を使ったスマートな会議を導入し、兵庫県政の経費や時間、体力面でよりスマートに運営するよう検討いただきたいと思う。 ・生活が豊かで便利になると、今後も買い物はネット通販、仕事はリモート等を活用し、個人で完結する生活や働き方というような傾向は進むのではないか。 ・将来はロボットだらけの世の中になると思う。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	ただ、5G という言葉だけが先行して実際どう使って何をするかはよく分からない。これから出て行くかな、という感じ。 ・5G に関連して、東播磨でローカル 5G を使った「HYOGO 情報通信基盤未来都市整備モデル事業」で、積極的にテクノロジー導入をしていると勉強した。東播磨は良い取組みをされていると感じた。 ・スマートフォンで何でも調べられるので、人間の能力がどんどん衰えていくのではないか、ネット依存が深刻になるのではないか心配している。 ・スマホを持っている人が増えたが使いこなせない人が多い。	
⑪防災減災	・前回の台風 21 号で芦屋浜から西宮浜がけっこう被害が出て大変なことになっている。六甲山から下を見ると被害が一望できる。機会があれば六甲山から大阪湾をみてもらうことも大事なのではと思う。 ・当団体の運動の一つを紹介させてもらうと、今年、花火大会を開催した。これは、阪神・淡路大震災から 25 年を迎えたが、多くの若者が震災を経験していないため、今後発生する確率が高い南海トラフ地震、また近年多く発生している自然災害に対して、恐ろしさと備える大切さを伝えていきたい。花火大会という市民が喜んでくれるツールを使って、そのメッセージを届けるため開催した。花火は、西宮市の犠牲者数にあたる 1,146 発を打ち上げた。	・30 年後の未来ということだが、30 年後に南海トラフ地震が発生する確率はだいたい 70%～80%といわれている。こういった大きな自然災害時には、市や国による支援物資提供など公的援助があるが、それだけで全てを賄うのは不可能である。各家庭での備えや、災害発生時の避難場所のシミュレーション、そういった自助の面と、各地域での要援助者の救助、消火活動といった共助、この３本柱が必要になってくる。花火大会については、自助の意識を向上させることができればと思い、開催した。今後も団体として、別のアプローチになるかもしれないが意識づけはしていくと思う。

４　にぎわいのあるまち

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
①外国人労働者の受入れ		・日本人人口の減少とともに外国人労働者の受入れが活発化すると想定している。 ・地域では外国人労働者の増加が必要である。 ・魅力あるまち制度を作り、呼び込むかを考える必要がある。 ・人口減少を補うため、外国人労働者の受け入れるとともに、外国人獲得競争に勝っていく必要がある。中国はベトナム人などを誘致している。 ・海外の労働力を入れないと、日本はまわらない。西宮は神戸－大阪間という好立地なので、観光以外も伸ばしていくことで、よりよい地域づくりができる。そのためには、海外の人が地域コミュニティに入りやすい環境が必要である。受入時に、多様な価値観を伸ばしていけたらよい。もしそれができたら、将来的に当団体に外国人が入る可能性もある。
②人材確保・雇用	・サービスの担い手を行政単体ではなく、民間から生み出し、財政負担を減らす、いわゆる協働をもっと前に出した活動ができるとよいが、人材不足により協調性のある年齢層が少ない。 ・企業誘致など、東京圏に対して競争力をつけること。 ・働き方改革や定年延長などにより労働力の高齢化が進み、耕作放棄が加速している。 ・大阪の統合型リゾート IR が完成した場合、大阪府の調査によると３～４千億の経済効果がある。私が特に気になったのは、３万人から７万人にかけての新たな雇用が創出されると言われていることである。 ・現在、日本は急激な人口減少や高齢化に直面している。その中でも持続的に成長し、人々の生活の質を高めることが求められている。	・元気に現役で活動できる高齢者が多くなってきたので、高齢者も貴重な人材として、長く仕事に従事できる社会になってきた様に思う。 ・経験豊富な高齢者の力を地域にいかす。（地区ボランティアセンター） ・労働力確保のために、働く意欲を持つ高齢者や女性が働ける環境が整えられることで、世代・性別に関係なく活躍の場が広がる。 ・高齢化対応としてバス運転士の採用枠を 65 歳以上まで広げ、雇用創出に努めている。 ・人口密集地である阪神南部には農業に関心のある担い手の種になるような人も多くおり、今後の農村部への人材供給の入口的役割を果たすことができるように都市農地相談センターで都市農地貸借円滑化法を活用した農地のマッチングに取り組んでいる。 ・人材確保のため、高齢者の活用や人材を育成する。 ・小学校６年、中学校３年、高校３年の制度は変わっているかもしれない。働きながら学生をしている人が増えるかもしれない。 ・いくつになっても収入源があり、そのような生き方が担保されるとよい。 ・いろんな人が直接出会って行く、気づきあう場がある、といった場をつくり続けることで何かを生

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		む土壌になるので、このような場を提供するのが中間支援としての役割である。 ・学生の就職先や定年を迎えた人の再就職先として医療、介護分野が選ばれるように就職支援や広報活動をさらに強化する必要がある。 ・農業生産以外の魅力ある産業を育成する。 ・担い手育成は、組合員による従事分量配当制にこだわらず、広く一般から農業活動に優秀で意欲のある人材を登用し、新規作物への取組みや新たな技術による販路開拓等組合活動への活性化を図る。 ・地域の雇用を増加させるため、企業訪問を実施する。 ・働き方改革は働かせ方改革、働きがい改革である。 ・人口が減少すると当然就業人口が減る。そこは、外国人の雇用を考えないといけないということもあるが、では、どのような形で受け入れるのか。移民なのか、単に労働力を確保するだけなのか、この辺りを考える必要がある。
③交通機能の整備・安全対策	・地形上、阪神地域は南北の移動が不便なため交通政策が必要である。（デマンドタクシー等の導入、将来を見据えた自動運転による移動サービス等の導入実験） ・南海トラフ地震時の被害が東西の広範囲に渡って影響する。 ・高齢者の社会参画、労働参加の必要性が高まっているため、移動手段の確保が課題である。 ・スーパー閉店に伴う買物難民の増加や寂れる中心市街地の問題がある。 ・ラストマイル問題（バス停から自宅までの移動手段がないこと）が発生している。 ・学校統廃合に伴う通学手段の確保が課題である。 ・人口減少や高齢化が進む農村部や傾斜が多い山手地域では、生活に必要不可欠なものとして、誰もが移動しやすい交通環境が求められているが、バスの利用者の減少により、交通事業者の経	・道路・橋・ガス・水道管などのライフラインの耐久年数を考えた保全と安全維持が必要である。 ・タクシーを簡単に利用できるようにする。 ・タクシーの近距離で可能な使い方を考える。（運転手にポイントをつけるなど。） ・東西の交通に関しては問題ないが、<u>南北間の交通網の整備</u>ができれば地域のつながりが広がると思う ・サイクルステーションについては、兵庫県が事業者を公募し、民間が運営するべきである。 ・自転車教室については、兵庫県、川西市と定期的に開催しているが、年間３回くらいしか回っていないのでもっと広げていきたい。自転車教室は警察と安全協会も行っているが、それとは差別化する。開催する自転車教室は、実際の通学ルートを車載カメラで撮影し、危険な箇所などを解説する。子どもたちもより真剣に見てくれる。 ・道路整備を進めて、エコ・サイクリングタウン川西を目指したい。 ・当社一般路線バス車両では、バリアフリー対応車両の導入率は 100%だが、ノンステップバスの導入を継続するなど、更に高齢者が利用しやすい環

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	営状況が圧迫され、路線の維持が困難となっており、危機的な状況である。 ・道路が慢性的に渋滞している(阪神高速、尼宝線等)。 ・買い物難民を防ぐための高齢者の買い物支援が必要である。 ・サイクルマップはあるが、スポーツサイクルを借りることができる場所（サイクルステーション）がないので、手軽に始められない。 ・県内では播磨中央公園にサイクルステーションができるようだが、１か所だけは意味がない。県民局エリア毎に１か所は整備が必要。 ・高齢者運転が原因の交通事故率が減らない。 ・自転車を通勤に使う人が増加したが、活用できるサイクルロードが少ない。	境作りに努める。 ・安全面対応の対応としてMM(モビリティマネジメント)活動、車両の安全装置などの高度化、運輸安全マネジメントを実践する。 ・MM（モビリティマネジメント）活動として、高齢者、学童を対象に安全教室を開催し、バスの死角などを知ってもらい事故防止に努め、あわせて利用促進活動も行い、将来の公共交通利用者の創出に繋げている。 ・「人」だからこそ可能なおもてなし部分について見つめ直し、顧客満足度を向上させ、地域にとって必要不可欠な会社であり続けたい。 ・車内の混雑が緩和し、買い物時の混雑もレストランでの待ち時間も無くなり、人との接触が減少し、ストレスが緩和されるので身体的、精神的に楽になる社会。子どもへの虐待や DV、パワハラなどが減少すると考えられる。 ・当社は地域交通を担う事業者である以上、沿線地域とは切っても切れぬ関係にあり、沿線住民とのつながりは非常に重要であると認識している。 ・人口減少により、当社も含めた交通事業者の収支が悪化し、公共交通の運営が維持できなくなる恐れがあるため、将来的な地域交通の維持について、行政と事業者が一丸となり検討する必要がある。 ・今後高齢化がさらに進み、交通弱者がこれまで以上に増えることが見込まれるため、駅からの二次アクセスの整備等、高齢者の活動を支援する取組みについて、行政と事業者が一丸となって検討する必要がある。 ・高齢者ドライバー問題などもあり、移動販売や移動診療など民間では採算が困難な事業について、官民一体となった運用の必要性が高まる。 ・猪名川や宝塚西谷地区などでは直売所出荷を生きがいにされている高齢者も多いので、コミュニティバスに直売所への出荷機能を付加する。 ・沿線のまち歩き事業の実施により、地域の人々との連携や交流を促進し地域の活性化を図る。 ・日々の電車運行、既存の駅施設の改修、新しい路線の整備など、弊社で実施するあらゆる事業において、地域団体や自治体等と密に連携し、沿線が

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		より住みよいまちとなるよう取り組んでいる。 ・消費、公共交通、医療の分野で高齢者が容易に活用できる機能が少ないので、不便な状況が改善されその地域に安心して住み続けることができる仕組みを地域の大学等を活用し、調査・研究することでそれを実現する仕組みを構築する。 ・鉄道高架下を利用した教育施設(武庫川女子大学)や野菜栽培所などの例があるように、高架下を活用する。 ・地域の子どもを対象にしたイベント等、地域に根付いた取組みを今後も行い、沿線と共に成長し続ける未来を目指す。 ・交通機関を利用する際の混雑が緩和され、混雑対策にかかる費用が減少する。 ・社会資本の維持のために、１人当たりの費用負担は増加(例えば、税金や鉄道運賃が増額)し、このことへの不満が出る。 ・費用負担増加問題を解消しながら社会資本を維持できれば、地域社会がより充実したものとなっていくと考えられる。 ・お客様満足度向上のため、お客様の声を参考にしたCS活動を実施。 ・地域の方向けの講演会や地域の子ども向けイベントとして特別列車の運行等を行っている。 ・次世代交通に関する取組み（自動連転実証実験等)を行う。 ・公共交通機関としては自動連転やMaaSの発展について産学官の連携ができることが望ましい。 ・新たなテクノロジーの投入により、道路には維持管理の低廉化、簡易化と自動運転技術への適応が可能になり、交通インフラには安定的なサービスとシームレスな利用環境の整備、ラストマイル輸送の確保による高齢者にもやさしい移動環境ができ、地域全体として安全且つ安全なまちづくりに繋げてもらいたい。 ・自動運転車が普及している。 ・自転車事故の多発への対策を加速させる。 ・新しい交通システム、交通モードを導入する。 ・地域コミュニティバスを自動運転で運行し、地域住民の円滑な移動を担保する。 ・多様な移動手段を実現する。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		・自動運転を実現させる。
④小規模事業者の発展	・輸送技術の進化などにより都市近郊農業として軟弱野菜などの鮮度維持が難しい商材が地方産地から量販店の店頭に並ぶようになり、競合する結果、価格低下により専業農家の生活を維持できるだけの所得が得にくくなってきた。 ・南部には大型商業施設や大病院の集中し便利だが、北部には南部のような施設が近辺になく不便である。買い物難民の対策が必要である。 ・市民の商店街離れが著しい。 ・農村部の農家や都市部の小規模事業者において、経営者の高齢化や事業承継問題が深刻化している。 ・市内外への大型量販店の進出により消費者の消費に対する思考の変化が小売業等小規模事業者の経営に大きな影響を及ぼし、事業規摸の見直しや廃止等の現象が見られる。 ・最近では「新型コロナウイルス感染拡大」や「自然災害」「事件、テロ」といった緊急事態が起きた際、事業資産への被害を最小限に食い止め、中核事業を継続させていち早く事業全体を復旧させるために、平常時や緊急時における様々な対策や方法をまとめた事業継続計画(BCP)が重要となってきている。 ・昔から阪神北地域と阪神南地域では六甲山系を境に日常の市民の交流ができにくい状況があり、中小や小規模事業者等企業間の経営上の交流についても同じような状況である。 ・あらゆる技術の進歩により、経済が発展し文化的で快適な暮らしが進んでも、大きな家の高齢者世帯、未婚の若者単身者世帯などが残り、都市と農村における地域格差が広がっていくことを懸念する。	・買い物(外出)支援ネットワークを構築する。(市町単位の社会福祉法人の連携、高齢者に対してのファミリーサポート、デマンド交通利用の負担軽減などの取組みが必要である。) ・当団体は地域の経済団体であり、地域の活性化という点で重要な役割を担っているが、より多くの事業者が当団体に属し、地域経済を支えていくことが重要であり、その結果として、地域貢献に繋がっていくと考えている。 ・<u>買い物難民を出さないためにも、地域経済を支えている小規模事業者が持続的発展をしていける地域社会づくりの取組みや行政施策が必要</u>である。 ・JA は従来、農家である正組合員を運営者として意向を反映してきたが、政府規制改革委員会などの答申などにより、増え続ける消費者である利用組合員の意向反映の仕組みづくりに取り組むことが重視されてきている。 ・非農家の地域住民に従来の農業との接点をもってもらうようなイベントや取組み(ミニグリーンツーリズムなど)を地域政策として金融店舗(支店)などを中心に実施する。 ・高齢化が進む郊外では買い物難民などが増加する。 ・商店街が取り組む事業に対して、金銭的、人的支援、情報提供を行う。 ・小規模エリアでお金が環流することは、阪神北地域では可能ではないかと考える。 ・各種団体の活動活性化を図るため、各団体のキーパーソンへの支援や関係を深めるとともに、活動補助対象の多様化を図る。 ・広報支援、地域への認識を高める。 ・<u>農業分野では縄張り意識を排除</u>し、三田阪神地域で協力体制を構築するといった交流が必要である。 ・<u>広域的な集落営農活動が継続できる農業生産活動への支援、担い手の育成、販売物価格の安定、生産コストの低減、農業生産を通じた都市との交流施設の充実</u>を図る。 ・商品作りにおいては、消費者の使用シーンが変わ

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		ってきており、時代に合ったものを提供できるように技術の蓄積が重要である。 ・農業生産活動においては、営農の組織化、法人化による安定化を図ることで、地域資源としての農地の維持管理と営農活動の継続は可能である。 ・営農活動に参画しない農家等（土地持ち非農家の増加）への対策が急務で法整備も含めた行政指導を願う。 ・農村家庭の三世代（中には四世代）同居家族が存在する。地域社会を継承していくことが大切である。
⑤経済・産業	・住宅都市としての側面が強く、観光を核とした地域経済の活性化が進まないこと。 ・阪神地域には、スーパーコンピュータ、SPring-8 といったものがない。 ・平成 30 年に灘五郷の酒が GI（地理的表示）の指定をうけたことから、酒造会社では主として輸出の拡大に注力している。 ・酒米農家では、後継者不足に悩んでいる。 ・農産物の販売が安すぎる。農協は本来の仕事をしておらず、金融業務に偏っている。 ・神戸に海外の文化が入ってきたと考えると、やはり世界を見渡した中での伊丹市だと思っている。私がよく海外のことに言及する理由は、車の市場を毎日見に行くときに、そこにはいつも外国人がいる。相場が高いものを良い値段で買ってもらっているからであり、利益につながっている。 ・宝塚市に在住し、新大阪で仕事している。宝塚には商業施設が少ない。川西市と比べると多いが、尼崎市の東海道沿線に比べるとオフィスビルは少ない。景観の問題もあるかもしれないが、宝塚の駅前がもう少し再開発でビルが増えれば、「宝塚市で仕事をしたい」と思っている人はいるのではない	・地元商店街は縮小され、ドラッグストアがコンビニ、スーパーとともに残る。 ・地方はスーパー向けが多く、大量生産の体制が整っているが、宝塚市では家内工業となっている。 ・尼崎市は経済中心の都市になっているだろう。 ・本日も SDGs のバッジを付けているが、次のようなことにも取り組んでいる。例えば、農家では後継者不足に悩んでいる。当社では、（酒米産地と特定の酒蔵との間で結ばれる）村米制度により、山田錦を生産する農家とは百数十年の付き合いがあるが、こうした問題の解決に一緒に取り組んでいる。 ・農産物など田舎でできることを流通にのせて収益を上げるシステムを構築し、<u>農業でも生計を立てられる</u>ようにしてほしい。 ・若手に農業の魅力を与えてあげたい。 ・兵庫県では、大阪や神戸で起業する人が多い。新温泉町や佐用町に大阪や神戸で培った技術や経験を伝えていきたい。 ・難しいかも知れないが、30 年後を見るなら、福知山沿線に商業施設などのオフィスが増えるとよい。 ・外出しなくても物を買うことができる社会になったが、<u>人と会うために外に出て積極的に活動すれば活性化</u>するのではないか。<u>空き店舗も積極的に活用</u>する方がよいと思う。 ・２つある。１つ目。尼崎はものづくりの町。ものづくりをする企業は在宅勤務が不可能なので、コンピュータを使って自動化するなど、新しいものづくりの仕方が最もポイントになってくる。特に

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	か。宝塚駅の主要駅にバルがあれば、飲みに行ってお金を落とす。 ・令和２年 11 月１日～11 月末にワンコインスタンプラリー事業を実施する。３コイン（500 円、1,000 円、1,500 円）までで、宝塚市内の人の周遊化、経済の活性化のために行う。 ・コロナ禍ではあるが、尼崎は元気な印象。大手ゼネコンなどは売上高が前年対比で減少しているが、中小企業は確かな顧客がいて、堅調。建設業界は、依然人手不足と言うことも聞いている。コロナはしばらく続くので、地元の活性化をどうするか。コロナで潰れてしまうのか、それとも糧にして成長するのか、団体の会員は、少し前までは 4,600 くらいで、一度 4,500 くらいに下がり、今は 4,836 である。会員数 5,000 を目指して頑張っている。このように団体の会員が増えているのは、１つは金融、経営相談を積極的に行っているから。また、コロナに感染しない、させないという取組みも当団体の一つの役割である。 ・職務として事務方を務めており、兵庫県の経済についての私見である。今年の新型コロナウイルスの影響を受けたことで、兵庫県では多くの店舗が閉店に追い込まれ、その数は日本で４番目となる。この社会背景には、２つの問題点があると思う。まずは、兵庫県民の高齢化と苦しい資金繰りの現状である。神戸市は大都市と言われながらも貧困率は高く、他の大都市と比べてもあまり豊かとは言えない。貿易のまちと言われていたが、海外の経済効果を享受しているとは言えないのではないか。 ・兵庫県について深く考えなければならないと思った。川西市については考えてきたが、兵庫県の大きなくくりの中	中小企業は我々もそうだが５人以下とか 10 人以下のところも多い。そういうところはテレワークができないのでコンピュータの支援をお願いしたい。今もやっていただいているが人の代わりにロボットがものを作るという機械化を補助金等でもっと幅広く支援して欲しいと思う。２つ目は尼崎港について。港がしっかり活躍できるような環境になって欲しい。たまたま歴史資料館で聞いたところ尼崎のバブルは江戸時代らしい。そのときの尼崎藩の領域は兵庫港まであったので、尼崎の港が伊丹、灘、住吉の酒を全部出荷していた。尼崎港を新たな一つの港にし、伊丹空港も近いので空と海を兼ね備えた産業都市にするための指導、支援をお願いしたいと思う。 ・ベイエリアをこれからどうしていくのかというのはポイントになっていくと思う。大阪とどう連携するかが重要になっていくのではないだろうか。これから万博があるがその後大阪がどういった形で変わっていくのか。これからくるだろうと言われている IR の関係もあるのでそういう意味では大阪湾岸エリアをどうしていくのかという風になってくると思う。広域的に見たときには阪神間だけでなく淡路から関西空港くらいまでの広域の湾岸エリアをどうしていくのかということを考えていくとせっかく瀬戸内海に大きく面している兵庫県なので、そこをいかにいかしていくかが大事かなと思う。 ・この西宮が含まれる阪神地域は、特に兵庫県の中でも工業、商業そして神戸空港を中核とした今後のインバウンド需要、復興に向けて、兵庫県経済の要と考えている。かつて日本第三の都市である神戸市を中心に兵庫県は活動していたと思うので、ぜひ阪神地域にも目を向けてもらい、積極的な技術面での設備投資を検討してもらいたい。 ・かつて日本経済で第三の都市と言われていたような活気を取り戻すことが、今後の兵庫県全体の経済復活に重要であると考える。それには、労働力と観光客を増やす政策が必要で、神戸の中心地と言われる三宮界隈にいかに外国人を増やしていくかが鍵になる。西宮は大阪神戸に挟まれた立地で、阪神間の人口移動を支えており、神戸が栄え

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	で何ができるか、盛り上げようという意識はなかった。地域で発展させようという考えは間違えではなく、兵庫県の活力に繋がると感じたし、県政にも興味を持つことができた。	ることは、西宮にとっても大きな恩恵を享受できることに繋がると思う。ぜひ、日本経済第三の都市に向けて、海外からの優良な労働力、観光客を増やすための政策をしていただきたい。
⑥ツーリズム・地域振興・地域資源	・農業に適した地域が多いが、そのイメージやブランド力が弱い。 ・海岸沿いに観光・散策できる場所が少ない。 ・大阪・京都と比較し、旅行客が少ない(観光資源が少ない)。 ・住みたいまちランキングで上位に名を連ねる西宮市や芦屋市といった地域が、住んで良かったまちランキングでは出てこないことから、事前期待度を上回る施策が打てていない。 ・地域資源の観光化・インバウンド対策が必要である。 ・北摂地域に関してサイクリング目線では、自然が豊かである。交通量が少なく適度なアップダウンがある。 ・大阪市から川西能勢口まで 20 分程度で、空港(伊丹)からもアクセスがよいが、インバウンドが未知数ではあるものの、サイクルのレンタル場所がないなど、地域外から来る人の受け入れ体制がない。 ・ゴールデンルート上にあるが、単なる通過点である。 ・豊富な観光資源があるにも関わらず、日本政府観光局の調査では、兵庫県を訪れるインバウンド旅行客の訪問率は、ここ数年変化がない。 ・日本への玄関口である関西国際空港、大阪港から大阪-京都を訪問する俗に言う“黄金ルート”から外れた印象がある。 ・今回の新型コロナウイルス感染症の影響で途絶えてしまったインバウンド対策をリセットするなど、新たな施策を検討するべきである。	・<u>各市町が持つ特徴・個性・資源は一定の経済圏の中で共有</u>されるべきである。 ・生活圏については、今後市町の枠食いは不要である。 ・エネルギー問題を考えていく。 ・社会全体で資源の無駄遣いが減って欲しい。 ・植物の鑑賞や、空間の雰囲気作りは必要である。 ・植物に対する考え方、関心があるかないかを問い直す必要性がある。 ・清和源氏のつながりがある市町村間と様々なイベントをコラボし、歴史文化の展示等についても繋がりある市町村間と連携し歴史の理解を深める。 ・世代別のニーズに合ったイベントの開催、おしゃれなマルシェや朝市、夜市などを開催し、川西市内商店街の活性化を積極的に進める。 ・地場産業をもっとアピールできたらと思う。阪神淡路大震災前は酒蔵がたくさん残っていたが、震災の時に酒蔵がたくさんつぶれた。 ・<u>阪神地域は兵庫県の東の玄関口であることを自覚して、伊丹空港の整備等により、インバウンド等の外国人を導入する</u>方法を模索すべきである。 ・電車に乗ってもらうことが沿線の活性化に繋がる。各市とも連携しながら、酒造りやスポーツを核とした地域振興、観光フェスなどを行っている。 ・今般、伊丹市から神戸市にかけての日本酒に関する日本遺産認定があった。この機会をいかしたい。 ・交通事業者としてマイクロツーリズムの担い手として適していると思われるので、<u>地域におけるシビックプライドの向上</u>に向けても取り組んでいきたい。 ・今般の日本遺産認定により、今後の観光資源として期待される。このため、日本酒を製造する各社では情報発信基地を持っているので、PR に力を入れていきたい。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・川西市は、阪急電鉄、能勢電鉄、JRが通っており、新名神高速道路のインターチェンジもあり、伊丹空港も近いが、川西市内に観光の目的地になるような場所がない。 ・道路事業に従事する立場から、周辺の環境を変えないように、どのような事業ができるのか考えてきた。周辺に目をやると、六甲山、有馬や芦屋のまち、西宮などがあり、観光を支える道路として運営している。 ・六甲山の斜面を削って、一つ一つを丁寧につくった住宅が、芦屋には広がっている。こうした街並みも人々の目を引くのではないかと思われる。世界遺産に認定されるかもしれないヨドコウ迎賓館もそのうちの一つである。 ・神社の境内に種をまいて数十年後にもみじのトンネルをつくる活動や、スタンプラリー企画、芸術祭、民話にちなんだ物語イベントなどを行っている。SNSによる情報発信にも職員で少しずつ取り組んでいる。 ・東京から尼崎を見てみると、ダウンタウンや、大阪と甲子園の間ということくらいしか出てこない。観光という点では、首都圏では、阪神間をまったく知らない。 ・２～３年前、当ホテルの稼働率が100%だったのは、大阪におけるインバウンドのうち、あふれた客の利用があったことが要因である。 ・中国人のホテル利用者によると、尼崎はどこにいくにも便利であるという回答があった。 ・尼崎では、良くも悪くも「アマ」という単語が連想される。「アマ」という意味合いは大事で、兵庫県の観光において失ってはならないものではないかと思う。 ・尼崎には、近松、尼崎城、寺町、（具	・観光客を呼び込むためには、地域を面で捉える必要がある。例えば、宝塚は、宝塚温泉の開湯から800年が経つこと、ウィルキンソン発祥の地であることがあげられる。ウィルキンソン関連では、宝塚において炭酸鉱泉が見つかったことで、炭酸水の工場を作り、隣にホテルをつくった。炭酸水の商談相手である外国人は神戸港に着いた後、宝塚に来た歴史もある。その後、現在の西宮市塩瀬町生瀬に工場が移転され、現在はアサヒ飲料(株)が明石市において製造している。 ・当館は、NGK、USJ、キッザニア甲子園、大阪城、京都、竹田城、神戸、姫路城などに訪れる人のハブ旅館として利用される。尼崎市、西宮市、芦屋市、宝塚市の４市のみならず、広いエリアを面としてとらえて、人々がどのようにすれば来てくれるのかを考える必要がある。 ・道路事業に際して、マイクロツーリズムと絡めて何ができるか考えていきたい。 ・東六甲展望台が、人気ドラマ「半沢直樹」のロケ地となり、放送された。これも契機として観光につなげていきたい。 ・マイクロツーリズムでは、地域資源の磨きなおしが大切になると感じた。従来、「日本全国から」「世界から」「国際的」などがキーワードであったが、これからは県内の人に来てもらい、地域の魅力を知ってもらうというのが必要となる。 ・首都圏の方は阪神間を知らないので、まずは場所を知ってもらうことが大切である。観光では、４市（尼崎市、西宮市、芦屋市、宝塚市）だけで勝負するのは難しいのではないか。大阪、神戸、京都に近い阪神間は、各地域とのハブとして活用してもらう。 ・（中国人のホテル利用者からは、尼崎はどこにいくにも便利であるという回答があったので）狭い地域の資源だけでは人を呼び込むにも限界があることを踏まえ、周辺スポットとの近接性や、この地域の場所などを、全国的に周知することが最優先であると考える。 ・大きな方向性として、地域特性をいかしたツーリズムを情報発信していきたい。特に、酒蔵ツーリズムなどを展開したい。この地域は、阪神電車な

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	体美術の）白髪一雄氏、商店街などがある。非日常を体感できる空間があり、兵庫におけるスパイスのような役割ではないかと思う。 ・尼崎の運河は、きれいけど人がいない。 ・西谷在住、西谷に県所有の山が沢山ある。グランピングなどのアウドドアが注目されている中、災害時に非常に役に立つ経験と思う。昔、宝塚市立「少年自然の家」があり、すごく流行っていたが、閉鎖になって人が来なくなった。お酒も飲めて大人も子どもも自由に楽しむことができた。	どが奈良から姫路まで乗り入れられている。集客の強みをいかし、今般認定された日本遺産のストーリーを取り入れて実施していきたい。 ・最近学生と観光プロジェクトを立ち上げた。三田は人を呼び込む力がないのではないかと思われがちだが、成長できるポテンシャルを持っている。例えば、三田市の田んぼを一面見渡せるようなレストランや、森の中にカフェなどを作り、大阪や奈良、京都にないような強いコンテンツが、三田市の中にはできる。このような三田市、兵庫県にしかないようなコンテンツを作っていきたい。そうすると、市外・県外から人が来てくれるだろう。また、三田の自然に注目させる。三田市は高速道路の結節点となっており、大阪、神戸、京都からのアクセスが容易に可能な立地をいかし、自然に巡ってもらえると人が集まるなと考えながら三田市の観光を行っている。 ・三田市や高平地域に魅力を感じており、もっと<u>田舎に色んなコンテンツ</u>ができたらよいのではないか。私は田舎の旅好きなので、田舎の古民家に宿泊する、田舎でサウナができるなど、田舎に色んなコンテンツができたら面白いと思う。 ・オランダでは運河の情報がたくさん発信されている。この地域がオランダのようになればよい。 ・宝塚市立「少年自然の家」のような施設が復活したら活性化するし、山を利用して最低限のインフラを整備すれば、オフィスになったり、キャンプしながら仕事したり、災害時には避難所になったり、色々なメリットがある。自然を残しつつ宝塚の山を利用すればよいと思う。
⑦まちづくり	・三田市の大学生は大学には通うが、町の中に入ってくる機会がない。町の人と接点を結ぶ機会がないという現状の中で、町中に学生が集まれるこみんかという基地を構えることによって、普段会えない大人と普段話せないことを学生が話すようになる機会を作ることで、学生の人生が変わり、町にとっても新たな化学反応が起こっていくために、当団体ではこの場を作っている。	・兵庫県はポテンシャルのある強いまちが集まっている。例えば、篠山は自然空間や田舎をいかしている。様々な特徴をもった強いまちが兵庫県には集まっているので、その強い町自身の個性をいかせるような支えになるのが兵庫県、というのが面白そうである。<u>兵庫県はバラバラでよい</u>。全員がバラバラで行っていることを、一歩引いて見守る。各市町の魅力を伸ばし、それを全面的に支えるのが兵庫県としての支え方である。市町が同じ方向に向かう必要はなく、個々に際立つようにサポートしてあげるのがよいのではないか。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・森の中にレストランを作るといったものは、現状の決まりでは急に作ることができない。なぜなら、市街地調整計画により、三田の JR 沿線、もしくはこれより西側が市街化計画の対象になることが多いからだ。また、これよりも東側、いわゆる森の中に市街化調整区域というものがあり、容易には開発できない。 ・三田市は再開発をしようとしているが、昔から住んでいる人は景観や景色を守りたい。昭和の名残が美しい。しかし、今の状況では実際には盛り上がっていない。飲食店などの再開発が必要だと理解しており複雑な気持ちである。守りたいと同時に再開発すべきだと感じる。若者や色んな人を呼び込むには再開発が必要だが、潰したくないという思いがある。残したい気持ちと、開発したい気持ちが半々ぐらいある。三田の食文化、食の町にしたい、景観を残したい気持ちは理解できる。 ・自分の大学には都市政策系を専攻している人が、都市研究会という町の中での研究やロジックを考えている。私の大学では三田キャンパスが一番多いかもしれない。何かしら繋がりがあり、例えば三田市のバイトをしている人、こみんかの場所作りをする人、市の総合計画を市民と一緒にやっていくプロジェクトに学生枠で参加する人、三田の田舎の方の地域で活動する人など皆、関わりがある。 ・（市街化調整区域に関連し）淡路島の海岸線沿いにパソナグループが施設を建てており、淡路市民は良く思っていないようだと聞く。パソナが荒らしていると言われていたりする。このような感じになりかねないというのもあるが、時代的にも土地を容易に充てる時代でもないのでどうだろうか。	・市街化調整区域をなんとか変えたい。 ・この先、森の中にレストランを作り魅力化していく時に、市街化調整区域の制限を外すことで、逆にそこに出店者があり、景観にあった良さがなくなってしまうリスクもあるというのが難しい。今回、市街化調整区域を外す目的は、自然をいかしたレストランを作ることである。しかし、世の中様々な考えを持った人がいる中で、土地代が安そうな市街区域を買い占めるという考えを持つ人などを判別するのが難しい。また、それを市役所が審査する体制にすると市役所の意見で店が出せなくなる。本当に市街化調整区域をなくしてもよいのだろうかと考える。 ・様々な面があるが、制度や条件をつけた上で市街化調整区域をなくすという話ではなく、市街化調整区域として一定の開発を制限し、自然を守っていかないといけない。その中でどのような条件なら飲食店を出してよいのか、農村に民泊を出してもよいのかという制限、条件を作っていくのかが重要である。地元住民の理解を得られているという条件下で、一定の市街化調整区域を保ちつつ、条件に合えば実行してもよいという制度設定が大事だと思う。しかし、このまま兵庫県の森林・山間地域が賑わわず、その地域で店が増加しなければ、その地域の人口が減少していき、誰も森林を整備せず、誰も耕作農地に気をつけなくなり、その結果土地が荒廃してしまう。一定の領域を高めつつ、人が集まり、住みたくなるような状況を作っていかなければ、結局土地は放置されてしまう。 ・（日常生活や住むことに関わる部分で、地元住民が困っているという話を聞いたので）市街化調整区域を少し緩めた方が、地元住民も住民でない人も住みやすくなるのではないか。 ・同じような建物ばかり建っているのは残念。多様性のあるまちになればよい。 ・おだやかに生活できるようになればよい。 ・（まちづくり活動を行っている立場から）<u>身近な所に皆が集まる楽しい場所があればよい</u>。 ・もともとは尼崎の近くに住んでいた。公園などに行くのに、駅から自転車を利用できる道路が一層

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	・高平に昔から住んでいる高齢者と話をする機会があり、高平についてどう思っているのか尋ねた際に、息子を呼び寄せたいが、市街化調整区域があり、雑種地に新しく家を建てることができない。新しく家を建てることができないので、元から住んでいる人達も、息子達を呼び寄せたいので家を建てたいという申請が通らなかった。三田市は移住施策に取り組んでいる所にも関わらず、このように移住や息子達にも住んでほしいとなった時に呼びたくても呼べないなど、レストランの問題ではなく、日常生活や住むことに関わる部分で、地元住民が困っているという話を聞いた。 ・高平地域に魅力を感じる。大阪の人間なので田舎に興味がある。立地がよく、アクセスしやすいという点で三田市に魅力を感じている。 ・役場の関係課に知り合いになりにくい。集まりに出向いて、この件については誰に聞いたらよいか尋ねるなどする中で、出会いが繋がっていく。 ・一小学校区にコミュニティ連絡協議会がある。川西市でもさらに寄り合いの場を増やす考えがある。川西市コミュニティ連絡協議会で寄り合いの場が５か所ある。地域の方が先生になって講座を行っている。 ・「えんがわ CAFE」は他の地域から来てもよいけど、まちづくり協議会の事業であるから公にできない。しばりがある。「えんがわ CAFE」からプチレッスンで自分を披露し、そこから広がり、イベントを行っている方もいる。 ・まちづくり活動を行っている。 ・国道 43 号線から南は森構想のエリアであるが、この地域は主に工場が集積している。一方、国道 43 号線から北側には住宅地が広がっている。あまり	充実すればよい。 ・尼崎市民がまちを好きになるようなまちづくりをしていきたい。 ・昼休みには職場の周辺を歩くようにしているので、色々な散歩コースができればよい。景色が変われば楽しく歩けるので、色々な景色のあるまちになればよい。 ・森構想のエリア周辺では、工場集積地と住宅地がはっきりと分かれすぎているので、住宅と工場とが入り乱れる状態が理想ではないか。 ・森構想のエリアに、色々な人が楽しく簡単に来ることができるようになればよい。 ・尼崎のイメージが変わればよい。こんなに良いところなのに、過小評価を受けている。素敵なまちであることを知ってほしい。 ・素敵な建物が増えてほしい。 ・尼崎をベネチアのような住宅街にするという考え方もある。ゴンドラがあったり、家があったり。30 年くらいのスパンであれば考えることができる。この地域は用途地域であり、私たちの懸案。どうするかという問題。例えば、パナソニックが来て、すぐに出て行ってしまった。 ・2050 年を語る上でコミュニティが大事かなと思う。コロナの関係でこれからデジタル化が加速し、進展していくだろうと予測されていると思うが、その対局にあるのが FACE TO FACE の人間関係だと思う。そういう意味ではコミュニティの調整はひとつキーワードになっていくのではと思う。 ・持続的な成長を実現できるように、社会インフラを賢く使える都市空間の形成を進める必要がある。具体策の一つとして、コンパクトシティに期待が集まっているのではないか。コンパクトシティの実現により、健康で快適な生活の実現や環境面での持続可能性の向上、地域経済を支えるなど効果に期待している。 ・一極集中ではなく、地域分散がこれからのトレンドになっていくため、各地域に海外からの資本、人材を送り込まないといけない。 ・住みやすいところが他にあれば人は出て行ってしまう。そうなると西宮市の魅力が薄れてしまう。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	にも、工場集積地と住宅地がはっきりと分かれすぎている。森構想のエリアでは、晴れた日には淡路島から堺まで見えるような所である。 ・コロナによって働き方が大きく変わっている。その中で「パソナ」が東京から淡路島に来た。淡路島に来た理由は分からないが、魅力があってきたのではないか。三田市に来てもらえるよう魅力のある環境をどうつくっていくか。１年や２年でできないが、三田市のあり方を考える必要がある。魅力は人材であり、魅力あるまちを形成したい。少子高齢化による人口減少のなかで、まちづくりや人口が増加するにはどうしたらよいか、やり方があれば知りたい。 ・三田市では各小学校区に「まちづくり協議会」を設立し、将来の地域づくりについて、地域の事は地域で考えている。小さいことから地域の魅力を伝え、住んでいる地域を良くしていく。安心、安全なまちにするため、自分たちのまちづくり、魅力づくりをどうしていくか重要と考える。色々なことを「まちづくり協議会」で、魅力を発信している。それが人口増加に繋がるだろう。「まちづくり協議会」は、民生児童委員、婦人会、各種協議会等の支援団体が参画して、そのような構成団体でまちについて考えている。 ・農業従事者である。企業誘致をしたいが、調整区域であるため難しい。調整区域がネックで、家が建たず、企業は市街化調整区域のない市町に行ってしまう。 ・顔を合わせていないと、人が埋もれていく。最低限のことでしか、会社や学校での付き合いがないということになると、ピックアップされることがなくなる。ホームページに記事をアップ	予算に限りはあるが、例えば花を植える等、仕事等から帰ってきたときに、ホッとするようなまちづくりをしてほしい。 ・子ども達や学生が企画・運営し、大人が支える行事に転化していく。 ・「ボランティア活動は無償である」との考えは根強いが、有償化することで、若い人にも理解を得ることができる。 ・<u>テレワーク等で空いた時間に地域活動へ参加</u>してもらい、対価を払う仕組みができるかもしれない。 ・自治会の回覧板が機能しない（自治会未加入、いらないと言われる）ため、情報をネットワーク化し、登録者に情報を発信していく。 ・常設の場にふらっと立ち寄り、コーヒーを飲んで話ができると、住民の「やりたい気持ち」や「やるべきこと」を拾うことができる。 ・協議会で組織される委員会が NPO 法人を立ち上げ、経費として人件費を計上できるようになると、企業と同じ形で事業を実施できる。 ・コミュニケーションは今後変化していく必要があり、地域のコミュニティも工夫がさらに必要になってくる。

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
	しても誰も見てくれないということになる。コミュニケーションにより能動的に自分をアピールすることができる。 ・川西市のニュータウンは特に過疎化が深刻である。 ・コンパクトシティがあるからといって、全ての住民が移動を義務づけられているわけではない。また、一定数の人口が移動した場合に、残された人達の生活が悪化する可能性がある。空き家の増加や、コミュニケーションの低下といった課題がある。さらに、コロナによる対面のコミュニケーションが低下し、変化が必要になってきている。その影響については、当団体の新会員で調べようとしている。 ・以前、目の見えない人を誘導したときに、点字ブロックが剥がれているなど、街中に障害が多いということが分かった。 ・働く母親が多く、PTA などの地域活動に参加できない。企画を「コミュニティ」、活動は「PTA」とする役割分担の要望がある。 ・地域活動を手伝いたいが、どこに行けばよいか分からない人がいる。 ・人口減少で税収が低減になり、公費（コミュニティ協議会は市から年間の一括交付金をもらっている。）での活動に限界がくる。	
⑧魅力発信	・川西市に住み、事業をしているが、兵庫県内では川西市の知名度が低い。隣に池田市があり、梅田まですぐに行けて、どちらかというとベッドタウンという印象である。その状況の中で、観光としてもパンチが少ないと感じている。加西市と間違われたりするが、川西市の魅力を発信する方法があれば知りたい。	・世界から自分の地域がどう見られているかを意識することが必要。若者は Instagram、TikTok、Facebook 等で言葉を使わず、写真や映像を通して世界を意識している。これを地域で活用し、世界中から「いいね」が貰える需要のある地域になれたらと思う。阪神間は学校も多いので、今後を担っていく人達も多いということ。そういった意味でも、世界からどう見られているか、どうアピールするかを意識しながら、教育したり、自分の地域をどうつくっていきたいか考えたりする機

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		会をつくる必要がある。
⑨新型コロナウイルス感染症関連・その他	・大雨の異常気象による川の氾濫や土砂崩れなど大災害の発生が懸念される。 ・今回の新型コロナウイルスのことで、官と学の連携が十分ではなかった。 ・通年は市民まつりや例会で様々な人と交流し、多様な価値観を育成していたが、今年は新型コロナウイルスの影響で事業がなかなかできていない。 ・当団体では、この先の豊かな未来に向けて、日々課題解決に向けた活動をしている。 ・本年、当団体は 70 周年を迎え、その節目として過去から遡って、現在の立ち位置、そして未来に向かってどう進むか考える年になった。 ・当団体のアドバンテージとして、40 歳を迎えると卒業するというものがある。これがなぜアドバンテージかというと、40 歳までの限られた期間のため、組織としての若さを失うことがない。なので、変化し続ける社会の中で、組織で常に新陳代謝が起こり、時代時代に応じた若者の運動が展開できる。この使命と 40 歳までというシステムによって、当団体は常に社会の状況を見ながら活動を展開している。 ・大学生や子どもを対象にした事業は、ややもすると我々が何かをしてあげる、もしくは大学生を労働力にしてしまうことが多いが、彼らは能力が高く、財産であると知った。	・行政にもコミュニティスキルが必要になる。好奇心を持てる人が行政マンになって欲しい。 ・行政機関のコントロール下にあるまちづくり会社はやめるべきである。 ・（今回の新型コロナウイルス感染症の対応について）後手に回ったことが批判されているが、産・官・学の連携を真剣に考えなければならない。官だけ、官・学だけではなく、産・官・学の三つの連携を具体的に考えてもらう必要がある。 ・新型コロナウイルスはなくなってほしいが、共存することになると思う。 ・テレワークを有効活用するという形で、必要なことだけ必要なところにということでよいと思う。世の中がテレワークに向かっているが、人の感情や熱の加減、肌の感じを感じられない。「ウィズコロナ」より「対コロナ」の形で進んで欲しい。 ・（食品販売等に従事している立場から）規制緩和がなされ、皆が自由に食品販売をできればよい。 ・ルールや規制を少なくする。その代わりに、倫理観、寛容性、思いやりなどが高まっていくことが重要ではないか。一般的に、公園などで犬は放し飼いにしてはいけないと言われる。人がいるときは犬にリードを付けるなどの配慮が必要だが、人がいないときまでもそのようにするのかという視点。そういうことは、個人のモラルでなんとかならないのかという意見もあるだろう。 ・自由度が高まったときの調整が規制。ルールで縛るのは簡単な話だが、ご機嫌な社会とは言えない。 ・（市街化調整区域の関係で）今、規制緩和が必要である。権限を持っているのは県である。ニュータウンに人を呼び込むためにそのような規制を設けた。人口が減っているところに人を呼び込まないといけない。現状にあった規制緩和をしていかなければならない。農業が見直されているのは事実であるが、前に進まない。地域にあった規制緩和をしてほしい。 ・当団体は、ミッションを掲げている。ミッションとは、より良い変化をもたらす力を青年に与えるために、発展、成長の機会を提供すること。つま

項　目	現状、課題等に関する意見	将来像、未来に向けた取組み等に関する意見 主なもの　※下線は将来像に関すること
		りは、世の中に変化を与えることである。我々はこれを運動と呼ぶが、運動を展開できる力を色々なアプローチの方法で、青年に提供する。要は、能力を伸ばすためのステージを用意することが、当団体の一つの立ち位置である。 ・当団体はミッションと 40 歳という年齢制限で常に新陳代謝が行われているので、団体は存続していると思う。なので、30 年後に今以上に社会に必要とされる組織になっていて、自分達が成長し、まちがより良くなるような活動をしていると思う。行政と連携し、色々な事業に取り組んでいけるような未来をつくっていると考える。 ・2025 年に西宮市は市制 100 周年を迎える。精一杯盛り上げたいので、県としても後押ししていただきたい。市民が一丸となるように共創、協働を発展させることが、2025 年の未来に繋がると考えている。